【白い部屋】

点野＠キルシュ

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

【白い部屋】シリーズ

Ｒ１５程度の下ネタが含まれますのでご注意ください。

ＢＬではありません。

目次

01『マス』 1
02『男湯』 16
03『混浴』 32
04『コタツでみかん』 49
05『鼎』 65
06『ウサ耳』 84
07『赤いシグナル』 104
08『指先のジレンマ』 125

01『マス　』

なんだか良く分からないが、何故か一護と恋次と剣八は妙な部屋に閉じ込められていた。
どんな経緯で閉じ込められたのか謎である。
「てか、ここどこだよ?」
一護は怒りを滲ませながら恋次を睨む、けれど…。
「それはこっちが聞きてぇ」
恋次も理由が分からないので一護を睨み返した。
ちなみに剣八は騒いでも無駄だと思っているのか、
腕を組んでじっとして喋りもしない。
「どうせお前がヘマして知らない間に閉じ込められたんだろ」
「なんで俺のせいなんだよ!?」
一護の言い様に恋次は青筋を浮かべた。
どちらかと言えばトラブルに巻き込まれるのは一護の方が多いような気が…。
二人の言い争いはエスカレートしていくが剣八は冷静だった、

特に急いでる訳ではないし、暇なら一護でも恋次でもどっちかと戦って、
暇つぶしをすればいいと考えているため冷静に見えているだけで、
思考回路はいつもと変わらない、ある意味動じないと言うか無頓着と言うか…。

部屋は真っ白で何も無く、広さは１２畳くらいだろうか。
のんびり寛ぐには広いが戦うにはちょいと狭いな…などと剣八は思う。
一護と恋次は無駄に言い争っていたが、剣八が何も喋らないので、
流石に気まずくなってどちらともなく口を噤んだ。
言い争っていても何も始まらない。
「ところで、」
突然剣八が口を開いたので一護と恋次はちょっとびびる。
一護としては顔を合わせれば戦えと言ってくる剣八とは、
あまり関わりたくないと少しだけ思っていた。
だって会うたびにそんなこと言われても正直困るし、
できれば戦いたくない、剣八は強いし周りの被害を考えると胃が痛くなる。
そして恋次は、元々十一番隊に所属していたことがあるので、
剣八のことは他所の隊長格よりもちょっとだけ親しみがあるのだが、

やはり最強を誇る死神が近くに居ると身が引き締まるし、
一護みたいに戦いを挑んでこないことが唯一の救いだった。
「この部屋から出るには壁をぶち壊せばいいのか?」
なんせ部屋にはドアも窓も見当たらない。
どういう仕組みなのかシーリングライトや電球も無いのに何故か部屋は明るく、
壁や床が微妙に発光しているのか視界は良好である。
剣八の意見に一護と恋次はなんとも言えない顔をした。
いつもみたいにその馬鹿デカイ霊圧でなんとかしようってことなんだろう、
できることなら穏便に、物を壊すとかの被害は出したくないのだが…。
「ドアとかないし、やっぱり壊すしかないのか…」
うーん。と一護は首を捻る。
「おい待て」
「なんだよ恋次」
恋次の待ったの声、壊すしか道はなさそうだけれど、
待ったの声に一護は恋次を見遣る、しかし何故か恋次の顔が青い。
「俺達…斬魄刀が無いみてーだぞ」
「なんだって!!??」

一護と剣八の声がはもった。
と言うか、何故そこに気付かなかったんだ。
一護は背中に手をやり剣八は慌てて自身の腰を見ると恋次の言うとおり斬魄刀がどこにもない。
「取り上げられたのか？
てか俺、死神の姿なのに斬魄刀が無いって意味が分かんねぇんだけど」
そもそも一護が死神になった場合、必ず背には斬魄刀がある。
今まで無かったことがない、斬月はどこに行ってしまったんだ。
死神の姿＝斬月と二人。　という認識があったため混乱しそう。
「これはアレか？　夢か？」
恋次の声は震えていて情けない。
「もし夢だったら脱出なんてできるのか？
つーか誰の夢なんだよこれ!!」
一護は地団駄を踏む。
妙な事件に巻き込まれたりすることが多々あるので、
一護は素直にこれは誰かの夢だと疑わなかった。
だってそれ以外の答えなんてきっと無いし、いつものことだから。

「取り敢えず壊すぞ」
剣八の低い声に一護と恋次は我に返る。
恐らくこの三人の中で物を壊すのに適しているのは剣八である、
恋次としては何かを壊して始末書なんて御免なので、
自分ではない誰かが壊してくれた方が助かるのだ。
一護も本当は穏便に済ませたい考えだし、
剣八がやってくれるならどうぞ！である。
斬魄刀がないので剣八は少し腕まくりをして、
勢いを付けて壁を思い切りぶん殴った。
ガツンと激しく大きな音がしたけれど壁は無傷。
久しぶりの素手喧嘩（ステゴロ）だったせいか、
剣八は無傷の壁に小さく舌打ちをする、鈍ってるなんて認めたくなかった。
そこで一護は恋次に耳打ちをする。
「（剣八の力で壊れないってことは…どういうことだ）」
「（俺が知るかよ！）」
こそこそ内緒話だけれど、三人しか居ないのだから当然剣八に聞こえている。
なんとも納まりが悪く、剣八は何発か殴ってみたがやはり壁は無傷だった。

「どうなってんだ…」
流石に剣八もおかしな壁に悪態を吐いた、己の力を持ってしても壊れないとは…。
拳が若干赤くなっており剣八は仕方なく壁から離れる、
殴っても傷ひとつ付かないのだから、斬魄刀が無い自分達にはきっとなにも出来ないだろう。
なんせ三人とも破道はおろか縛道すらからっきしなのだ、
恋次は少しだけ破道を心得ているようだが、
一護も剣八も真央霊術院を卒業していないので鬼道の『き』の字すら持ち合わせていない。
頑丈すぎる壁に囲まれた部屋に三人…さてどうしたものか。
「ここはひとつ、助けが来るのを待つってのはどうだろう」
「そうだよなぁ…壊せそうにないし」
恋次の提案に一護は頷き、やることもないのでその場に座り込んだ。
それにならって恋次も床に腰を下ろし、剣八もなんとなく座る。
「実際ヒマだよな、なんもやることねーし」
親切にテレビもないしスマホだって無い。
無駄に時間を過ごすくらいなら宿題やりたい…。

「ん？」
愚痴を零す寸前で一護が何かを見つけた。
今まで何も無い真っ白な部屋だったのに、いつの間に？
なんだろうと一護は手を伸ばし何かを掴む。
それは…。
「……なんだこれ」
一護が掴んだのは紙だ。
そこには予想も想像もしていなかった言葉が並んでいる。
「どれどれ？　……なんだこれ」
気になった恋次が一護の手元を覗き込んで同じ事を呟いた。
どうやら二人にしてみればぶっ飛んだ内容だったらしい。
「寄越せ」
今度は剣八、二人が顔を青くしているので意味が分からず、
剣八は一護の手から紙を奪った、そこに書いてあったのは…。
「…三人で『マス　　なんだこりゃ？」
剣八が読み上げたことで一護と恋次は青かった顔が瞬時に真っ赤になった。
「け、剣八！　声に出して読むなよ!?」

「ま、マスって…三人で?!　ちょ　どういう　おいーーー!!!」
恋次はやり場の無い羞恥を一護に向けて叫ぶ。
「俺に言うなよ!!　こんなこと書いた奴に文句言え!!」
一護も顔を真っ赤にして恋次に言い返すが、
本当にこんなこと書いた奴だれだよ!というかコレどんな夢なんだよ!!
「じゃあコレ誰が書いたんだよ!!」
「俺が知るかー!!!」
「お前等うるせぇ…」
顔を真っ赤にしてヒートアップしていた二人に剣八は顔を顰める、うるさい。
年齢的に言えば剣八が一番年上になる訳で、
恐らく意味を分かっていても取り乱したりはしなかったのだろう。
「だが、文字は途中で途切れてるっぽいぞ」
「え???」
剣八の指摘に一護と恋次は顔が真っ赤のまま剣八の手元を覗く。
「ホントだ…　三人で『マス　の後が切れてる感じだな」
「…」
一護の呟きに恋次は視線を泳がせる。

なんせ一度でも下ネタなことを考えてしまったから、
もし続く言葉があったとしても、思考がそこからなかなか離れてくれない。
「この三人でマスってやつをやれば部屋から出られるのか…？」
お願いだから声に出して読まないで…一護と恋次は益々恥ずかしくなる。
「マスに続く言葉ってなんだ…」
腕を組んで低く唸る剣八。
「ま　ま　ますt」
「やめろ一護!!」
「あぶねぇ危うく言っちまうところだった…」
「と言うか、なんもねーのにどうやってやるんだ」
「!?」
剣八は冷静に言い放ち、一護と恋次はやっぱり顔を赤くしたまま驚いて固まる。
「け、剣八はど　道具とか、そういうの使うのか…？」
「聞くなよ一護!!」
「だって普通に疑問だろ!?」
「道具っつーか、こういうの」
言いつつ剣八は空中に指先で四角を描いた。

（さっぱり意味が分からねぇ…）ｂｙ一護＆恋次

四角ってことはエロ本か？　だったらわざわざ四角を描くだろうか。

「と、とにかく！　手掛かりがそれしかねーんだから、

やっぱり三人で…やるしかねぇだろ…」

物凄く恥ずかしいけど、恋次の正論に一護はがっくりと項垂れ、

剣八は特に表情を変えることもなく小さく頷いた。

「気が進まねぇな…」

「こんな状況じゃ俺だって無理っぽい…」

一護と恋次が情けない声で呟いて大きな溜息が真っ白の部屋に落ちた。

「それじゃ、見るのも見られるのも嫌だし三人で背を向けようぜ」

「待て」

恋次の提案に待ったを掛けたのは剣八だった。

「見えなかったらタイミングわかんねーだろ」

「「タイミング!?」」

おいおい、どういうことだ、まさか三人で輪になって致せとでも言うのか。

てかタイミングって、最後は三人で一緒にとか訳の分からないことを言うのか？

「それに三人じゃ数が足りねーと思うんだが」

「…」
「…」
　なんだか妙な空気だ。
　もしかして剣八は意味が分かってないのだろうか。
　数が足りないってどういう…。
「普通なら紙みたいなの持つだろ」
「へ…？」
「紙…？」
「実際にやったことねーから詳しくは分からんが」
「ちょ、ちょっと待て剣八」
「なんだ？」
　一護は慌てるように剣八の肩を掴む。
「お前、もしかして、マスの意味分かんねーのか？」
「知ってるぞ」
「だったら紙なんて必要ねーだろ!?
　お前普段のオカズはエロ本なのか!!」
「……」

剣八は押し黙る。
ちなみに恋次は目上の隊長格に意見はできないので一護に任せている。
と言うかそんなことわざわざ隊長格に詰め寄りたくない。
更木隊長がエロ本見ながら…とか、想像したくもない。
一護の口から具体的な言葉が出てきて剣八は言葉を失っていたけれど。
「エロ本は関係ないだろ」
「お前が紙とか言い出したんだろうが！」
「紙かどうか知らん。　だから詳しくは分からんって言ったんだ」
一体どういうことなのか、三人それぞれにちんぷんかんぷんである。
一護と恋次は同じ意味で共有しているようだが、
なんだか剣八だけズレている様な気がして、
黙っていた恋次が恐る恐る片手を挙げた、いつの間に挙手制になったの。
「なんだ恋次」
剣八が促すと恋次はとても言いにくそうに、ひとつ咳払いをして。
「あの、更木隊長の考えてるマスってなんなんすか？」
「マスゲームのことだろ？」
マスゲーム!!!!!!!!!!!!!

一護と恋次撃沈。
まさかの答えに二人は抱えきれない強大な羞恥に身悶え床に倒れた。
下ネタなこと考えちゃった自分が恥ずかしい、
剣八は自慰すら知らないのかと驚いてしまった自分を殴りたい。
至極真面目な剣八の答えがあまりにもピュアで、
邪な考えを持った自分を本気で絞め殺したい気分だった。
「そ、そうっすよね…マスゲームはプラカードみたいなの持ちますよね…」
「だろ?」
恋次のめちゃくちゃ小さい声に剣八は得意げに頷く。
指先で作った四角はプラカードのことだったようだ。
「立て、やるぞ」
その台詞少し前に聞いてたらシャレにならない…。
一護と恋次は渋々起き上がって一列に並ぶ。
そもそもマスゲームをやったことがないのでどうすればいいのやら…。
マスゲームは物を持たなくても同じ動作を行えば良いのだが、
体操とかダンスとかやったことのない三人は途方に暮れる。
「あー、じゃあ、ラジオ体操でいいんじゃね」

これなら多分三人共通で知っているだろう。
一護の弱々しい声に頷きつつ、曲の無いラジオ体操を三人で、１２１２！
第一を終えたところで部屋が光に包まれお互いの顔が認識できなくなった、
眩しくて目を瞑ったら…三人が気が付いたのは十一番隊の隊舎にある道場だった。
「夢…？」
のんびりと起き上がってぽつりと零れ落ちた一護の声。
「結局だれの夢だったんだ…」
今度は恋次、一護と恋次は顔を見合わせて視線を泳がせた。
なんせ二人は『マス』を下ネタ的な意味で捉え、
それを実行しようとまでしていたのだから、なんとも言えない気分だ。
「無事に脱出できたみてーだな」
二人は慌てて剣八の声に振り仰ぐ。
「つか、お前等二人はなにを考えてたんだ？
マスゲーム以外にどんな意味があったんだ」
「それ素で言ってんのか…」
一護のうわずった声のツッコミに剣八は腕を組んでふんぞり返る。

「まさかそのまま『マスをかく』だったとか言うのか？
三人で顔突き合わせて自慰な訳あるか馬鹿馬鹿しい」
「「言っちゃったよこの人ーーーー!!!!」」
せっかく言わないようにしてたのに台無しじゃないか！
責任を持ってこの落とし所の無い羞恥をなんとかしやがれ!!
最終的に二人は真っ赤になった顔を両手で覆って再び床に沈みゴロゴロ転がる、
そんなアホ二人に剣八はやれやれと肩を竦めたのだった。

終わり

０２『男湯』

例によってまたもや三人は真っ白の部屋に閉じ込められていた。
前回の部屋は剣八が殴っても壊れない恐ろしく頑丈な部屋だったので、
教訓を生かして部屋を壊そうとは思わない。
「またかよ…もうどんなことがあっても驚かねーぞ！」
一護は一人で拳を握り天井に向かって叫んだ、
勿論恋次も同じ気持ちだ、二度とあの羞恥を味わってなるものかと強く思う。
今回も指令のように紙があるかもしれない、
一護と恋次は部屋をくまなく探してみる。
剣八は欠伸を零しながら壁に凭れて何もしていない。
本当はお前もやれよ！と言いたいところだが、
剣八に何を言っても本人に興味がなければ動かないのを知っているし、
恋次は目上の隊長格に進言などできる訳が無い。
結局一護と恋次の二人で部屋の隅々まで探してみたけれど、
今回は何も手掛かりが見付からなかった。

「どうすんだよ…早く帰って寝てぇ…俺徹夜明けなんだぞ」
「ここで寝ればいいじゃん」
恋次のボヤキを聞いて一護は適当に答える。
「枕が変わると眠れないとかそんな繊細な生き物でもないだろ」
「お前…喧嘩売ってんなら買うぞ」
「残念ながら斬魄刀はねーぜ、例の如くな」
「クソ…!」
恋次は前日、月締めの書類に追われて徹夜で業務を行っていて、
隊長である白哉に再提出を何度も言い渡され、
仕方なく何度も何度も書き直しを繰り返してやっと解放されたばかりだった。
最終的には自業自得なのだが、本当なら自室で睡眠を貪りたいところ。
しかしこんな所で寝る訳にもいかないしとんだ災難である。
一護と恋次の二人が盛大な溜息を吐いた時だった。
「おい」
「なんだ?」
剣八の声に顔を上げると何故かどこかを指差していた。
そっちの方を見てみると…。

「はァ!?　あんなの今までなかったぞ!?」
「いつの間に…」
　驚く一護と震え声の恋次。
　剣八が指差した先には今まで無かったはずの扉があったのだ、
　見た感じは古民家の玄関みたいな造りで、暖簾が掛けられてある。
　突如として現れたその扉はどう多く見積もっても…。
「銭湯か?」
　恋次の間抜けな声。
「ご丁寧に『男湯』って書いてある…」
　一護の声も心なしか細い。
「他に何もねーんだし、無意味に時間を過ごすよりはちっとはマシだろ」
　言いながら剣八が歩き出しさっさと暖簾を手で避けて扉を開けてしまった。
「ちょっ　待て剣八!何か罠があるかもしんねーぞ!」
「そ、そうですよ更木隊長!!」
　もしかしたら扉の向こうは奈落に繋がる底なし沼かもしれない、
　何が起こるか分からないんだから少しくらい慎重になってもらいたいものだ。
　すると剣八がちらりと二人に振り向いた。

「普通に風呂場だぞ」
「「マジで!!??」」
剣八が扉を開けた先、そこは古びた銭湯のような脱衣所があった。
木でできたレトロなロッカーがどこか懐かしさを覚える。
番台は無いようだが脱衣所の隅のは小さな冷蔵庫があり、
そこには冷えたコーヒー牛乳やフルーツ牛乳がガラス越しに見える。
水色の羽をこさえたでかい扇風機があったり、
誰が使うんだと言わんばかりのマッサージチェアまで。
「至れり尽くせり…的な?」
「これは俺に対するご褒美だきっと!がんばって残業したかいがあったぜ!」
「違うと思うけど…」
「なんにせよ、ここまでお膳立てされてるんだから、
素直に受け取って風呂に入ろうぜ!」
まぁ反対する理由もないので一護はしょうがないかと頷く。
そんな二人の遣り取りを気に留めることもなく、
剣八はとっとと隊首羽織を脱ぎ死覇装も潔く脱いでいた、早い。
レトロなロッカーは背が低く、その上にタオルや歯ブラシ髭剃りまで用意され、

挙句の果てには様々な銘柄のシャンプーやリンスまで揃っている。
ここまで用意周到だと逆に怖くもあるのだが、
白い部屋のお題（？）を達成しないと解放されないみたいだし、
結局はなるようにしかならない、もう諦めの境地である。

実は一護、頻繁に銭湯は行ったことがないので妙に緊張する。
例えば家族旅行とか、部活の合宿とか、そういう機会があまりなかったので、
剣八と恋次が何も気にせず服を脱いでいることに若干緊張してしまった。
だって今まで誰かと一緒に銭湯や温泉に入る機会が少なかったのだから。
そう考えると、剣八も恋次も自分より少し大人なんだな…と思ったりしなかったり。
と言うか剣八は確実に年上だし事実大人なのだが。
ちなみに剣八と恋次は普段から隊舎で集団生活を送っているため、
隊舎にあるデカイ風呂を利用していて銭湯とそう変わらない。
風呂場に入ると壁には大きな富士山が描かれていた、今時珍しい光景である。
剣八と恋次はそれぞれに設置されてあるシャワーの前に腰掛けて頭を洗っていた、
一護もそれに倣い少し離れた場所のシャワーを手に。
普段使っているいつものシャンプー&リンスやボディソープがあってほっとした。

既に広い浴槽に浸かっている剣八は長い髪が湯に入ろうが構わず、
特に表情を変えることなく目を閉じている。
現世の銭湯や温泉では髪を浴槽のお湯に浸けるのはマナー違反で、
本来であれば店側から注意されるのだけれど、
ここには三人しかいないから剣八は気にせず髪が湯に浸かろうが放置、
日頃隊舎の風呂でもそのままである、咎める者は誰も居ない。
ちなみに恋次は髪を洗った後にタオルで頭をぐるっと巻いている。
一護は一通り頭と身体を洗ってから剣八が浸かっている広い浴槽に足を入れと…。
「あっっ!!!」
思った以上に熱くて慌てて足を引っ込めた。
「剣八、こんな熱いのに平気なのか?」
「このくらい平気だ」
「おっさんか…」
「一護…!」
流石に隊長格に向かってその口の聞き方はどうかと恋次が突っ込む。
だが剣八は一護のおっさん発言に特別何も感じていないようだ。
現世と尸魂界では時間の読み方は同じでも流れが違うため、

一護が剣八に向かっておっさんと言ってもおかしいことではない。
事実剣八は一護よりだいぶ年上である。
「ぐだぐだ言ってねーで入れよ、熱いなら皮膚の表面に霊圧張っちまえばいい」
「なるほど!!」
（ツッコミが俺しか居ねぇ…）
剣八のズレた発言とそれに納得している一護、そして恋次の心の悲鳴。

三人で広い浴槽に浸かって誰ともなく溜息が零れ落ちる、
その溜息は勿論憂いではなく極楽なものだった。
「俺へのご褒美、ありがとう白い部屋」
「お前のためとは思えねぇんだけど」
「じゃあどんな理由だ？言ってみろ」
「そう言われると分かんねぇな…」
恋次と一護の声が風呂場に響いて、三人だけの空間はどこか異質である。
しばらくまったりお湯を堪能していたら剣八がぽつりと。
「恋次」
「は　はい!?」

いきなり剣八に名前を呼ばれて恋次は声が裏返ってしまった。
以前十一番隊に所属していたとは言え直接名前を呼ばれることは滅多に無く、
今現在もあまり接点がないため妙に強張ってしまう。
なんせこの男は最強の死神である『剣八』の保持者であり兇刃の鬼だ。
「脱衣所の冷蔵庫に酒はあったか？」
「あ、見てきます」
「待て、分かんねーならいい」
わざわざ見てきてもらうと言うのも心苦しいので、
剣八は自分で見てこようと立ち上がった。
コーヒー牛乳とフルーツ牛乳は見えたけど、
もしかしたらワンカップ的な酒があるかもしれない。
「「わぁああああああ!!??」」
「うおっ　なんだ？」
突然二人が叫ぶものだから剣八は驚いて二人を見下ろす。
ただ立ち上がっただけなのに叫ばれるとは思わなんだ。
普通ならスルーしておくのがマナーなのだが、
立ち上がった剣八の股間がしゃがんでいる二人の視界にばっちり入って、

一護も恋次も思わず叫んでしまった。
「隠せよ!!!」
「〜〜〜!!」
血の気が引いて思いっきりドン引きした。
やはり他人のそこを見てしまうのは、なんとも言えない居た堪れなさがある。
一護は隠せと突っ込んだが恋次は何も言えず顔を逸らした。
「わりーな、見苦しくて」
言いながら頭に乗せていた手拭でさり気無く股間を隠し、
剣八は大股で風呂を上がり脱衣所に行ってしまった。
「……なんだあれ」
「な、なんだったんだろうな…」
一護も恋次も声が震えている。
もうお分かりだと思うが、剣八のアレがソレだったので二人は驚いたのである。
更木隊長の斬魄刀は大太刀並みの『剣八』でした本当にありがとうございます。
萎えててアレかよ…と、青い顔した二人はがっくりと項垂れ砂になって崩れ落ちた。
一護も恋次も子供ではないが、かと言って胸を張って大人だとは言えない、
微妙な位置に居ることをなんとなく痛感してしまった。

「そう言えば剣八って恋人とか居ないんだよな？」
「どうだろうな、そういう噂は一度も聞いたことねぇよ」
しかし童貞とも思えないのだけれど、逆にあの男が女を抱いたとも思えない。
寧ろ自慰すら結び付かない、謎に包まれている男、更木剣八。
「あれで童貞だったら魔法使い通り越して妖精王だな、てか寧ろ魔王か」
一護の台詞に恋次は思わず苦笑い。
「あの隊長のことだから、欲情ですら闘争心に注ぎ込まれてる気がする」
「あー…　確かに」
ばしゃばしゃと顔を洗いながら恋次は溜息混じりひっそりと零し、
一護も同意して同じく顔を洗った。

風呂から上がると剣八は先に上がっていたので死覇装姿で、
脱衣所にある長椅子に腰掛けて酒を飲んでいた。
どうやら冷蔵庫にはお酒も用意されていたようだ。
いつもツンツンにしている髪が下ろされているだけなのに、
なんとなく雰囲気が違って大人っぽいような気がしないでもない。
剣八が隊長になったばかりの頃は髪を下ろしていたのだが、

一護と初めて顔を合わせた時には既にツンツンに尖らせて鈴を着けていた。
普段とは違う一面を見てなんとも言えない違和感が残ると言うか、
知らない一面を垣間見た気がして変な感じだ。
「恋次、お前どっち飲む？」
風呂から上がったばかりの一護はタオルを腰に巻いたまま、
少し振り向いてコーヒー牛乳とフルーツ牛乳を持って。
「俺フルーツ」
「ほらよ」
一護がフルーツ牛乳を軽く投げて恋次がキャッチ。
瓶だから落としたら大変なのだが、そこは死神ですから難なくキャッチですよ。
甘いフルーツ牛乳を二人そろって腰に手を当ててゴクゴク。
「ぷはー!!うまい!!」
動作も声も揃っている。
「子供か」
なんとなく笑っているような剣八の声。
「うっせーよ!!」
青筋立てて反論したのは一護だけ。

美味しいものは美味しいんだからしょうがないだろ。
フルーツ牛乳を飲み干して一護も恋次も着替え始めた、
そう言えば…と一護は顔を上げて。
「なぁ剣八」
「なんだ」
「お前って恋人とか居ねーの？」
「…は？」
突然の質問に剣八は酒を持つ手が宙に浮いて止まる。
「なんかお前が女とあれこれとか、全く想像付かねーんだよな」
「想像してもらわなくて結構」
くだらないとばかりに終止符を打ち剣八は再び酒を口に。
「じゃあやっぱり魔王なんだ…」
「そこはせめて鬼神にしとけよ」
一護は剣八を魔王と思って疑わないようだ、
あまりにも失礼なので恋次が突っ込む。
おい剣八、童貞だと思われてるぞ。

「で、」
脱衣所で一護の声が響いた。
「今回の指令って結局なんなんだ？」
「紙らしきモンはなかったよな」
風呂から上がって服を着てまったりしていたのだけれど、
いくら待っても指令（？）が来ないので痺れを切らしたのだ。
「って言うか、おい剣八！寝るな!!」
「んあ？」
風呂上りにお酒を飲んでいい具合に睡魔がきたようで剣八はうつらうつら。
寧ろ恋次の方が眠くて酷い顔をしている。
「俺そろそろ限界だわ…徹夜明け舐めんなｚｚｚ」
「恋次!?　剣八もどさまぎに寝てんじゃねーよ!!」
二人が撃沈して取り残されてしまった一護。
どうしよう…このままじゃきっとリアルに戻れない。
「……もうどうなっても知らねぇ!!」
いちごはふてねをえらんだ。

三人は同時に目を覚ました、そこは何故か十一番隊舎の脱衣所だった。
一瞬まだ夢の中かと思ったが内装が違うし広さも違う。
のんびり起き上がって大あくび。
「戻って来られたんだよな?」
「恐らくな」
一護は十一番隊舎の風呂に入ったことがないのでここがどこだか分からない、
しかし先ほどの白い部屋にあった風呂場とは少し違うことに気付いて呟いたのだ。
恋次は見知った懐かしい場所だったので肯定したにすぎない。
「先日といい今日といい、あの白い部屋はなんだったんだ…てか眠…」
きっとここはリアルなんだろう、再び寝落ちてしまった恋次を見て、
一護は起こすのを辞めた、徹夜明けなら起こさない方がいいかもしれない。
そこで不図、顔を上げて脱衣所を見渡してみる。
なんと隣に居た剣八が服を脱いでいた!
「なんで脱いでんだ!?」
「もう一回入る」
「え、意味不明」
「夢の中かどうか知らねぇが、なんか気持ち悪ィから」

「…」
言われてみれば確かにそうかもしれない。
知らない場所で目の前に銭湯があったから何の疑いも無く入ってしまった。
剣八の言うように正体の分からない妙な感覚が肌に纏わりついているような…。
「俺も入ろうかな…」
「フルーツ牛乳はねーぞ」
「うっせぇ！子供扱いすんな！」
反論したら笑われた。
隣で服を脱いでいる剣八を思わずちらりと盗み見て、
夢の中（？）の出来事は夢じゃなかったんだと思い知る。
「それにしても鬼だ」
「なにが？」
一護の投げ遣りな声に剣八は首を傾げる。
「なにがってナニですが何か!!」
言いながら脱いだ死覇装をカゴにぶち込んだ。
ぶっちゃけそんなの見たら自信失くすわ!!!
「大きさのこと言ってんのか？　そんなのどうだっていいだろ」

「嫌味か!?」
「そもそもお前等のナニの大きさなんて見てねぇし興味もねぇしどうでもいい」
そう、剣八は興味が無いことにはトコトン興味が無い、
寧ろ知った処で何かの役に立つ訳でもあるまいし。
それにしても酷い一日になった、一護はこれでもかと大きな溜息。
妙な白い部屋に強制連行されるわ鬼畜なナニは見せられるわ、
踏んだり蹴ったりだ！　あ、でもフルーツ牛乳は美味しかった。
服を脱いで手拭を手にしたところで。
「おい一護」
「なんだよ」
「風呂上がったら恋次連れて行けよ、ここで寝てても邪魔になる」
「…へいへい」
脱衣所ですやすや寝ている恋次に一瞥を呉れて、
一護と剣八は風呂場に足を踏み入れたのだった。

終わり

０３『混浴』

例の如くまたしても三人は白い部屋に閉じ込められていた、
三度目ともなれば三人とも慣れると言うものだ。
「おい…」
震える恋次の声。
今回は徹夜明けではなさそうです。
「お、おう恋次…」
「……くだらねぇ」
答えた一護と溜息混じりの剣八の呟き。
前回の部屋で突然現れた銭湯の扉は今回は初めから出現している。
なんと今回は『男湯』ではなく『混浴』の暖簾になっていたのだ！
「混浴ってアレだよな、男と女がごちゃまぜで入る風呂だよな」
「それ以外に何があるんだ、嫌な予感しかしねーから俺は入らないぜ」
顔を赤くすればいいのか青くすればいいのか困惑している恋次と、
苦虫を噛み潰した顔で吐き捨てる一護。

「でも、もしかしたら俺達以外にもこの部屋に強制連行された誰かがいたら大変だ」
どことなく焦っているように見える恋次、大丈夫か？
「なんだお前、もしかして混浴に入りたいのか？」
「男のロマ…ゴホン！　心配だから、一護お前中の様子見て来いよ」
「なんで俺!?」
「(更木隊長には頼めねぇだろ！)」
「(だからって何で俺なんだよ！)」
二人の耳打ちは剣八にしっかり聞こえているので耳打ちの意味が無い。
どうしたものかと一護&恋次は腕を組み首を捻る、
ちなみに剣八は混浴に興味がないので欠伸を零し壁に凭れて座り込んでしまっている。
斬魄刀が無ければ戦うこともできず一番の楽しみが存在しないため、
このまま寝てしまおうかと本気で考えていた。
一護と恋次はどちらが中の様子を見てくるかで揉めている、
じゃんけんで決めるか？それとも殴り合いか？
本当なら三人で同時に、と言うのが一番公平なのだけれど、
やっぱり隊長格の剣八にお願いするのは気が引けるし、

無表情だし取っ付き難いオーラ全開でめちゃくちゃ怖い。（主に顔が）
少しくらい喋ってくれたら少しはマシなんだが…。
今回の指令が全く分からない以上、部屋にそれらしい物は何もないから、結局は中に入って確認するしかないのだ、どうしよう…。
一護は決心して緊張しつつ剣八を見据える。
「なぁ剣八」
「あ？」
我関せずを決めていた剣八、一護に呼ばれてものすごく不機嫌な返事。
その低音なんとかしてよ普通に怖い。
「リアルに戻ったら俺と勝負しようぜ」
「!!」
「その代わり、混浴の中見てきてくんねぇ？」
「分かった」
「「分かっちゃったの!?」」
まさかこんな簡単に剣八が動いてくれるとは思わなかった。
それほどまでに剣八は一護と戦いたいらしい。
「中の確認と今回の指令を探せばいいんだな？」

「お、おう…」
物分りが良すぎる、一護は約束をしてしまって大丈夫だったのか不安になる。
剣八は立ち上がり混浴の暖簾を手で避けて扉を開けて中に入って行ってしまった。
「お前、あんな約束して大丈夫なのかよ」
「ちょっと後悔してる…」
「まぁ無駄死にしても俺はお前のことを忘れねぇぜ」
「恋次テメェ…!」
恋次に対して怒りを顕にした瞬間だった。
キャーーーー!!!
中から女の悲鳴!!　やっぱり誰かが風呂に入っていたのか!?
驚いたけど混浴だし扉を開けていいものか悩む、
一護と恋次は冷や汗ダラダラで固まって動けない。
すると扉が開いて剣八が顔を覗かせた。
「お前等二人の知り合いが居るぞ」
「ええっ!?」
「朽木の妹と、……名前なんだっけ」
剣八は首を傾げて再び風呂場（?）に顔を向けている。

「い、井上です！」
「だそうだ」
「ルキアと井上!??　なんでそんな所に!!」
一護が思わず叫ぶと今度は中からも大きな声が。
「その声は黒崎君!?　やだ！まだパンツはいてないのに!!」
「…」
「…」
身も蓋もない井上の台詞に一護も恋次も顔を赤くした。
と言うか井上、剣八に見られるのは平気なのか。
「おい、お前等二人以外には誰も居ねぇのか」
「はい！居りません！」
今度はルキアの声だ、こちらは隊長格に対して失礼が無いように、
少しだけ厳しい声をしているがやはり場所が場所なので思いっきり緊張している。
剣八は何を思ったのか風呂場（脱衣所？）に引っ込んで扉を閉めてしまった。
白い部屋に取り残された二人…。
「どうなってんだよこれ…」
「こっちが聞きたいわボケ」

もしかしたら素っ裸かもしれない井上と、風呂上りかもしれないルキアを想像して、二人は恥ずかしくってしばらく動けそうにない。

けれども。

「剣八は平気なのか？　相手が誰だろうと女の裸見て平気なのかよ！」

「戦い以外には本当に興味が無いんだろうなきっと…」

恋次の正論に一護は肩を落とす、平気で居られるのはある意味ちょっとだけ羨ましい。

一方風呂場（脱衣所）の中では。

「とっとと着替えろ」

「「はいー!!」

剣八の恐ろしく威圧的な態度と眼光に井上とルキアは顔を青くして叫んだ。

恥ずかしいとか通り越して怖くて堪らない。

うまく表現できないのだが、人類ではない全く別の恐怖と言えば近いだろうか、怪獣とか宇宙人とか、そのくらい剣八は人間味が無い。（と二人は感じている）

そのため井上もルキアも剣八に対して『男性』としての意識は無く、

ルキアにしてみれば目上の隊長格なので、

裸を見られた！と言う羞恥は皆無である。
寧ろ見苦しい物を見せてしまった！と言う感覚が多くを占めていた。
本当のところ、剣八としては二人の裸を見てもなんとも思っていない、
例えばこれが戦場であれば、相手が服を着ていようといまいと関係ないし、
欲情を携えぬくもりを寄せている訳でもないのだから、
やちるが風呂に入っているのと感覚的には変わらなかった。
二人が急いで着替えているのを目も呉れず剣八はロッカーをひとつずつ見ていく、
開けては覗いて舌打ちして、ロッカーを見終わると部屋を見渡し、
冷蔵庫の中やマッサージチェアを退かして裏を見たり。
「なんもねぇな…」
「更木隊長、何かお探しなのですか？」
不思議な行動をしている剣八を見て着替え終わったルキアが声を掛ける。
「おう、なんか指令とかそういうの」
「「指令…？」」
ルキアも井上もぐりっと首を傾げた。
いちいち説明するのも面倒なので剣八は扉を開けて一護と恋次に手招き、
どうやら二人に説明させるようだ、面倒なことは他人任せ。

「えっ　待て、入っちゃまずいだろ」
「そそ、そうですよ更木隊長、いくらなんでも…」
「朽木の妹もいのうえ?も着替え終わってんだから問題ねーだろ、
お前等が勃ってるのに立てないって言うなら後から説明しとけ」
「「ちょっ!?!?!」」
「更木さん、なぞなぞですか?」
驚く一護&恋次と、全く意味が分かっていない井上の不思議そうな声、
と言うか一護も恋次も座っていないので、
厳密に言うと剣八の言葉の使い方は間違っているし、
発音は同じなので瞬時に理解できるのは男くらいのものである。
ちなみにルキアも意味が分かっていないのだが、
剣八の手伝いをするため部屋をあちこち探している。
ひとつ補足しておくと、十一番隊はその性質上ほとんどが男でやちる以外に女が居ない、
常日頃から男達の下品な会話が多く、剣八もそれを良く耳にしている、
従って剣八も普通に会話の中に下品な内容が混ざってくるようだ。
一護は剣八と戦いの中で接触しただけで普段の生活なんて知らないし、

恋次も隊長格とはそれほど共にする時間も少なく、
更に六番隊に異動してからは剣八との接点などほとんど無いのだから、
十一番隊でどんな話題があって会話があるのか知りもしない。
とは言え、剣八は元々寡黙で口数が少ないため、
下品な内容どころか普通の会話ですらあまりしないのだけれど、
一般的な男の下品な内容は平気らしい。
「おい朽木の妹」
「は、はい!?」
「お前等はどうやってここに来た?」
「どうやって…と申されましても」
「白い部屋に強制連行されたのか?」
「は…?　いえ、そのようなことはなにも」
「ん???」
「え???」
珍しい剣八の素っ頓狂な声にマジびびりのルキア。
だってまさか剣八がそんな反応するなんて初めて見た。
強面の男がキョトンとしているのは、それはそれで見ものである。

「俺達は白い部屋に強制連行されて来たんだ、もう三度目なんだぜ」
「えええっ!?」
やっとのことで脱衣所に入ってきた一護が肩を竦めて愚痴り、
ルキアはそんな事件は初耳だったので実に驚いた。
「でもそんなのおかしいよ？　だってここ、女性死神協会専用のスパだもん」
「「すぱ???」」
初めてではないだろうか、一護と恋次と剣八の三人が声を揃えて首を傾げた。
井上は事実を言っただけなのに三人がそんな反応をするからちょっと引きそうになる。
「スパってほらアレだよ、えっと…スーパー銭湯みたいな！」
「ああ、そう言えば近所に新しいのできたらしいな」
「黒崎君行ったことあるの？」
「ない」
「大きなスライダーもあるみたい、ＣＭでやってたの！」
「へ　へぇ…」
風呂にスライダーが必要なのか一護は疑問だ。
しかし良く考えてみるとおかしな話である、

ルキアと井上が嘘を吐いているとは思えないけれど、
もしここが女性死神協会専用のスパだったとして、
白い部屋には『混浴』の暖簾が掛けられていたのだ、
けれどここはどうやっても混浴じゃない。
それとも『混浴』と嘘の暖簾を掲げ、一護恋次剣八の三人を罠にはめようとしたのか。
全く意味も分からないし理解もできないし謎すぎる。
脱衣所も風呂場も探してみたが指令らしき物はどこにもなかった、
だがルキアも井上もただ普通に風呂に入っただけなので、
出入り口からは廊下に出られるだろう。
結局手掛かりが無いので普通に脱衣所から扉の外に出てみる。
「うそ…だろ…!?」
「マジかよ…」
一護の狼狽える声と恋次の驚愕の声、だってそこは朽木邸の廊下だったのだから。
白い部屋は一体どこへ消えてしまったんだ。
朽木邸に女性死神協会の施設があるのは今更なので誰も突っ込まない。
「白い部屋から脱衣所に入ったよな!?」
「そんでもって脱衣所から出てきたよな!?」

一護も恋次も驚きすぎである、まぁ分からなくはないが。
「白い部屋はどこに???」
事情を聞いていたルキアは素直に呟いていた、
一護も恋次も剣八も、三人が嘘を吐くとは思えないし、
聞いていた白い部屋はどこにもないからルキアも井上もちんぷんかんぷんだ。
と言うか5人全員が不思議でしょうがない。
ぞろぞろと詰め所に向かいながら歩いていると、
一番恐れていたことが起こった。
「一護」
「え？」
上から降ってきた地を這う低音、それはどこか恐ろしく楽しそうな剣八の声だった。
「あ……（忘れてた）」
「もう用は済んだよな、…ヤらせろ一護」
うん、3分は固まったね。
ニタァと嗤う剣八、ガクブルの恋次&ルキア、どういう訳か顔が真っ赤の井上。
一護はあたふたと辺りを見回して挙動不審。
剣八の言い方が悪かったのか井上だけ勘違いをしている、

廊下を通り掛かった他の死神も、顔を青くしたり赤くしたり様々だった。
「約束忘れちまったのかよ、混浴の中を確認してくる代わりに、
一護が俺の相手してくれるんだったよな？」
剣八はさも楽しそうに言う。
「そ、あの、待て剣八！」
「アあ？　男に二言はねーモンだろうが」
「だからって、言い方！　その言い方辞めろ!!」
「ヤることはひとつだ、愉しもうぜ一護」
「ぎゃあああああああ!!」
一護は剣八に首根っこを捕まえられ廊下を引き摺られて行く。
「一護～！骨は拾ってやるからな～！」
「恋次テメェふざけんじゃねぇぞ！冗談言ってねぇで止めろよ！」
「黒崎くーん！更木さんとお楽しみがんばってね～！」（↑？）
「井上?!　違っ　そうじゃねぇんだ！　辞めろ剣八ー!!」
「そうか、一護は更木隊長とそういう…」
ふむ…とルキアは顎に手を当てて深く頷き冷静そうに見えるのだが、
自分の知らない世界が広がっている（ような気がする）ので、なんとなく頬が赤い。

「恋次お前ちゃんと説明しとけよマジで!!!
　って言うか剣八も訂正しろよ!!!」
「なんの訂正だよ？　ヤるって約束持ちかけてきたのはテメェだろ」
「そう、いや、違って　とにかく誤解だあああああ!!!」
　勿論、剣八はただ戦いたいだけで周りが誤解しているだけである、
　間違ってもＢＬではありません念のため。
「愉しくって融けるような熱い戦いをしようぜ」
「やめて…　もうやめてお願い…」
　一護半泣き、両手で顔を隠してさめざめ。
　そんな一護の首根っこを引き摺りながら剣八はものすごく上機嫌。
　しかしここで一護も負けていられない。
「おい剣八」
「？」
　ずるずると引き摺られながら一護は反撃に出た。
「勝負するって言ったけど、俺は一度も斬魄刀でなんて言ってないぜ」
「！」
　剣八の足がぴたりと止まる。

確かに言ってなかったような…。
「斬魄刀以外で！」
「……」
「じゃ、じゃんけん　とか…　だめ？」
ぎろりと睨み下ろしてくる剣八に一護は竦み上がった、
間違いなく目の前の男は最強の死神で兇刃の鬼である、
フツーに怖い。　てかそもそも顔が怖い。
「しょうがねぇ、だったら飲み比べといこうぜ」
「俺未成年なんですけどー!?」
「だったら他に何があんだよ！」
「お前の要求がいつも無茶なんだよ分かれよ！」
「あれもダメこれもダメってテメェはガキか！」
「んだと…」
「やるか？」
「や…　無理です」
「チッ」
「舌打ちした!?　おい今舌打ちしたぞ!!」

「うるせぇな…黙って戦え」
「ほんとお前戦うことしか考えてねぇのかよ、
そんなんだから恋人も居なくて結婚もできねーんだろうな」
「……」
「……」
「……」
「……ご、ごめん、今のはさすがに言いすぎた」
「テメェは好いた女の裸想像して勃ってるのに立てなかったくせに」
「勃ってねぇよ!?てか俺あの時座ってなかっただろ！普通に立ってただろ！
日本語の使い方間違ってんぞ!!」
「たかが女の裸ごときで他人に任せようなんて面倒なこと押し付けやがって」
普通は恥ずかしくなるモノだ、剣八が異常なのか興味が無さ過ぎるのか。
「もう勝負って言ったらアレくらいしか残ってな　」
「俺の負けですすみませんごめんなさい」
アレで勝負なんて言われたら負け確定である。
剣八が最後まで言い終わる前に一護が降参した。
「…つまんねーな」

と言うかアレの勝負で勝っても何も楽しくない。
結局剣八が一護を解放したのは三時間後でした、
それまで十一番隊で勝負するだのしないだの言い争いをして、
その間に一角や弓親、やちるが参戦しててんやわんやになったのだ。
しかしその三時間と言うのが絶妙で、井上には勘違いされたままだし、
ルキアももしかしたら…と勘繰ったままで、
二人からこれでもかと体調（主に尻）を気遣われた、
と言うか何故一護が受け（？）に思われたのか一護としてはとても理不尽。
まぁ剣八が受け（？）には到底見えないんだからしょーがない。
二人の誤解を解くのに更に一時間追加、恋次はそんな一護を眺めながら高みの見物。
今回一番の被害者は一護かもしれない。

終わり

０４『コタツでみかん』

もう動じない三人、例の如く白い部屋は四度目である。
しかし今回は白い部屋にはコタツがあり、机の上にはみかんまで用意されていた。
白い部屋自体はそれほど寒くないのだけれど、
目の前にコタツがあると日本人としてはなんとなく座りたくなる。
三人は特に言葉もなく目の前のコタツに座ることにした。
「みかんうめぇ」
恋次はしみじみ。　最近は虚退治よりも書類仕事が多くてストレスマッハ。
「久々に食ったわ。　てか恋次お前白い筋取らないのか？」
「食っても問題ないだろ、うめぇ」
うめぇしか言ってないぞ恋次。
二人がうまいうまいとみかんを食べるので剣八もみかんに手を伸ばした。
「ん…？　なんだこれ」
カゴからみかんを取ったらその下から何かが出てきた。
覗き込んでみると…掌に乗るみかんと同じくらいの大きさのサイコロだった。

重さはそれほどなく剣八はサイコロを指先で摘んで取り出してみたのだが、
そのサイコロは普通と違い、面に書いてあるのは数字ではなかった。
「…コイバナ？」
「「ッ!?」」
剣八の口からとんでもない言葉が飛び出て一護も恋次もみかんを噴くところだった。
慌てて両手で口を塞ぎなんとか噴くことを免れ、
恋次は畏れ多く剣八からサイコロを受け取る。
「なんか見たことあるぞこれ…」
剣八が呟いてしまった単語だけでなく、面には質問のような文言が書かれていた。
「護廷十三隊の宴会にでも使われてたのか？」
みかんもぐもぐしながら一護が恋次の掌にあるサイコロを覗き込みつつ。
「そうじゃなくて、現世でこれっぽいの昔なかったか？」
「…嫌な予感しかしねぇ」
一護は思わず冷や汗が流れ落ちた。
「今回の指令はこれっぽいな…他にはみかんしかねぇし」
「うわー　俺絶対イヤだぜ」
みかんを放り出して一護はごろんと背中から寝転んでしまった、コタツあったかい。

「何が楽しくて男三人でコイバナとか…」
恋次もサイコロを振りたくないようだ、げんなりしながらみかんをぱくり。
しかし一護と恋次は気付いた。
もしかしてこれ…剣八のコイバナを聞けるチャンスかもしれない!!
なんせこの男は最強の死神で兇刃の鬼であり、
人間味が一切なく私生活なんて謎に包まれ過ぎてまさにビヨンド!!
寝転がっていた一護はゆっくりと起き上がり恋次と目配せ。
ごほん!と咳払いをひとつ。
「なぁ剣八、お前からサイコロ振ってみてくれよ」
「そう言うならお前からやれ」
剣八はサイコロを一番最初に見つけたので、
サイコロに書かれている文言を見て認識している。
どれも二人の前では答えたくないものばかりだったのだ。
しかしこのままサイコロを押し付けあっていても現状は変わらない訳で…。
仕方ない、恋次は意を決してサイコロを手に。
「じゃあ、まずは俺からやりますんで更木隊長もやってくださいね」
剣八は返事もせずみかんをもぐもぐ。

「いきまーす　なにがでるかななにがでるかな」
だいぶ古い。
昔の某番組で使用されていたサイコロとサイズが違うので、
恋次は机の上でサイコロを転がしてみた、
ころころ転がってみかんのカゴに当たり止まったサイコロ。
「……脱童貞記念日。　てかお前童貞だろ」
「うるせぇええ!!」
出た面を一護が読み上げ恋次は机に突っ伏して叫んだ。
「お前だって童貞じゃねぇか人のこと言えるかボケ！」
「質問されてんのお前だろ、俺を巻き込むな」
「次お前だ！一護やれ！」
涙目になってる恋次があまりにも可哀想なので一護は肩を竦めながら。
「なにがでるかななにがでるかな」
恋次は気を取り直したのか嬉しそうに歌う。
なんせ自分はもう答えたのだから残るは二人の恥ずかしい話を聞くだけだ。
一護が転がしたサイコロは勢い余って机から落ちてしまい、
白い床を少し転がって止まったので一護と恋次は、

四つん這いになってコタツから出てサイコロの面を確認。
「…」
「…」
「おい、早くしろ」
二の句が継げない一護と恋次に剣八が苛々と吐き捨てる。
「これ、答えなきゃいけねぇのか…？」
その内容が予想以上に酷かったので一護の声は情けない。
「まぁでも、これは流石に…答えを聞いても居た堪れねぇだけだしな…」
恋次も無理に答えなくてもいいのではと考えたようだ。
だが、文言が見えていない剣八は三個目のみかんをカゴから取りつつ。
「恥ずかしいもクソもねぇだろう、ここには三人しか居ねぇんだし。
さっさと終わらせてくれ」
「……正直、覚えてねぇんだよな…」
「ア。？」
一護は苦虫を噛み潰したような顔をしながら呟いて、
転がっていたサイコロを机に置きコタツに戻る。
低い声を発してしまった剣八がサイコロの出た目を見てみると、

そこには『初自慰のオカズ』と書かれていた、確かに答えるのは憚られる。
「そもそもいつだったか記憶が曖昧だし、
恥ずかしくて答えられないんじゃなくて、ほんと覚えてない…」
「パスとかでき…ないよなぁあ～」
恋次も困ったようにコタツで項垂れた。
「ひとまず時間をくれ！　先に剣八やっといてくれよ、俺あとで答えるから」
今すぐ答えられないのであればどうにもならない、
早くここから脱出するにはサイコロを振るしかないらしいので、
剣八は仕方なくサイコロを軽く振る。
机の上で転がり止まったサイコロ。
「…コイバナか。　無いぞ」
「無いんすか!?　だったらここから出られないじゃないですか！」
「俺に言うな」
「す、すみません…」
質問はサイコロがしているので誰も剣八を責められないだろう。
剣八の冷たい声に恋次は震え上がり謝るしかない。
「逆に、サイコロの質問全部見た上で、

答えられそうなのひとつだけ答えるって言うのでどうですか？」
それサイコロの意味ないだろ。
恋次の提案に剣八は四個目のみかんの皮を剥き始めてスルー。
剣八としても他の質問を答えたくない気持ちが強い。
「だいたい…、」
剣八はみかんを指先で摘み白い筋を適当に剥がしながら。
「恋すらしてねぇのにコイバナなんてできる訳ねぇだろ」
童貞以前の問題だったーーー!!
「ざ、更木隊長は初恋もまだなんすか!?」
「マジかよ!?　お前童貞の俺達バカにする資格ねーじゃん!!」
「バカにした覚えは一度もねぇ」
確かに剣八は童貞に対して何も言ってなかったし、
二人をバカにした記憶は一度もない。
アレの事件だって剣八は二人に興味がなく、
大きい小さいについてはどうだっていいと言っていた。
「じゃ、じゃあ、剣八もやっぱり童貞なんだな！」
以前一護は剣八のことを童貞すぎて魔王だと思ったこともあったが、

さすがにそれは言いすぎのような気がするし、
この三人の中では一番長生きしているのだから、
一度くらいセックスしていても不思議ではない…可能性としては無くもない。
この際、相手は誰かと言うのは想像も付かないので排除。
「童貞ではないぞ」
「「えっ？」」
答えるとは思ってなかった一護と恋次の素っ頓狂な裏声が響いた。
二人の視線が突き刺さり剣八は特に気にすることなく五個目のみかんに手を伸ばす。
「隊長になったばっかの頃にたしなみだとかなんとかで、
無理矢理遊郭に連れて行かれたんだ、そこで少し抱いた。
何度か行ったが最後まで持った女が一人も居なくて、
結局つまんなくなって行くのを辞めた」
「最後まで???」
剣八の言葉の中で引っ掛かりを覚えたのか一護が本能で呟いた（意識は遠いまま）
「霊圧に耐えられんみてぇだ、何人相手にしようと最終的に俺以外みんな沈む」
まさかの武勇伝（？）を聞かされてしまった一護と恋次、
童貞の二人には想像も付かない全くの別世界でしかない。

と言うか一度に何人も相手にしたことがあるのか？
一体どんな状況だったのか詳しく聞きたいところではある。
「え、でも、最後まで持たないってことは…」
「穴さえありゃ相手の意識があろうとなかろうと射精はできるからな。
最後に一人だけ生き残ってもそりゃただの自慰でしかない、
駆け引きもクソもなくてつまんねぇだろ」
具体的な言葉が出てきて一護も恋次も声が出ない、
そもそも童貞なので少ない知識を掻き集めるしかなく、
なんて言えばいいのか言葉を見つけられなかった。
「俺…　剣八ってなんかそう言うの全く結び付かなくて、
女とあれこれとか…信じられない」
一護の素直な感想に、それこそ剣八も答えに詰まってしまう。
下世話と言うよりプライベートな内容は、わざわざ報告することでもないし、
一番身近なやちるにさえ教えていない、隠してる訳ではないけれど。
「そうだよな…更木隊長は女に現を抜かすとか想像もできないし。
変な話し、神聖な領域って勝手にイメージしてた…」
恋次の言葉に剣八は鼻を鳴らした、外部からの勝手なイメージは人それぞれである、

剣八自身は戦う本能でしか行動していないため、他人からはそう見えるのかもしれない。
「人間誰しも秘密を抱えてるモンだ、あえてそれを表に出すこともねーし、
隠したままで生きていくことを悪いとも思わねぇ」
言いつつ剣八は満足にみかんを食べたのか山盛りになった皮を机にまとめる。
「他人がどう思おうが自分は自分だ」
そう、例え童貞が過ぎて魔王と思われようとも。
つまり剣八は、今までその手の話を振られたり聞かれたりしたことがなく、
あえて誇示する必要もないので誰にも話していなかっただけのこと。
流石に居た堪れなくなったのか剣八は咳払いをして。
「で、一護、答えは思い出せたのか？」
「あ…まだ、てか多分無理な感じ」
じゃあもう一回振ってみよう、一護はサイコロを振る。
サイコロが止まって質問を見た瞬間。
「どう考えても童貞の俺をバカにしてんだろ!!」
コタツの天板をちゃぶ台みたいにひっくり返したい衝動を抑えられない一護。
「あー　もう想像とかでいいから適当に答えろよ、簡単で良かったな一護」

恋次にぽんぽんと肩を叩かれ宥められても収まらない怒り。
「好きな体位なんてわっかんねーよ!!」
「どうでもいいがさっさとしろ」
剣八はみかんをたくさん食べてお腹が満たされ早く帰って昼寝したい。
けれど一護はものすごく顔を顰めて答える様子が見られない、
恋次としても早く帰りたいので一護の答えを待つしかないのだが…。
「…名前が分かんない」
「は?」
むすっとしたまま呟いた一護の声に剣八と恋次の声がはもる、
この二人の声がはもるのは初めてかもしれない。
「だって体位って48とかそんくらいあるんだろ?
ひとつひとつ体位の名前なんて知らねーし…」
「確かに色々あるみてーだけど、好きな体位って例えばどんな感じだ?」
恋次は素で聞いているだけで、恐らく答えを導き出すことはできないだろう、
なんせ恋次も童貞なのだから。
「こう…正常位なんだけど、ちょっと違くて。
相手の腰が浮いてる感じ、うまく言えねぇ…」

「意味分かんねぇ」
内容が内容なので詳しく説明するのも恥ずかしく、
一護は言葉を選ぶことに必死だ、情報が少なすぎて恋次は首を傾げるしかない。
「正常位から少し女の尻を持ち上げて支えながら？」
「そう！それ！」
もしかしたらと剣八が聞いてみればビンゴだったようです。
「恐らく腰高正常位だな、アレは女が一番善がる体位だ」
挿入してその体勢に持ち込むと、ちょうど亀頭がＧスポットに当たるらしい。
「相手の尻をずっと持ち上げて尚且つ揺さ振るから結構な腕力が要る。
体位としての名称は無かったはずだが『つり橋』が一番近ぇか…」
「…」
「…」
知りたくもない情報に一護も恋次もなんとも言えない顔になった。
そもそも剣八がこの手の話をしているのを初めて見る（聞く）ので、
珍しいやら恐ろしいやら…何故だか異様に恥ずかしくなる。
「持ち上げつつ女の方がしっかり腕で体重支えてりゃ然程難しくも…　ん？」
微妙な顔してた二人の顔が少し赤くなっていることに気付いた。

「童貞だったな、すまん」
「「チクショーーーー!!」」
やったことあるみたいな発言は勘弁してください!!
大人の余裕見せられて悔しいったらありゃしない!!
人生も身長も給料も死神としての実力も、
何もかも上回っているのを見せ付けられるのは結構堪える。
二人はがっくりと肩を落とし泣きそうになっていた、
唯一勝てそうなのはもう顔と性格しか残ってない。（人による）

と、言うことで。
サイコロが一巡したことで部屋が光に包まれ、
収まったかなーと目を開けてみれば十一番隊の隊舎にある剣八の自室だった。
二間続きで広い部屋、しかもやちるまで居る。
「いっちーとれんれん急にどうしたの？剣ちゃんと遊びたいの？」
突然部屋に出現した三人にきょとんと首を傾げるやちるが今は最大の癒しである。
「剣ちゃんおなかすいたー！おやつはー？」
「みかん食ってきた」

「エー!?剣ちゃんだけずるい!!　あたしのみかんは!?」
剣八の頭にへばりついたやちるが剣八の髪を引っ張り耳を引っ張り大暴れ。
すると剣八は懐をごそごそして取り出したのは…やっぱりみかんだった。
「いつの間に!?」
驚く恋次、だってそのみかんはさっき夢の中（？）で食ってたみかんな訳で、
本当に、いつの間に懐に忍ばせていたのやら。
「このみかんやるからおとなしくしとけ」
「はーい！」
剣八からみかんを受け取ってやちるは満面の笑みでとても幸せそう、
さっきまでの地獄が嘘のようである。
リアルに戻ってきたので剣八は早々に昼寝を始めた、
一護と恋次は剣八の部屋に居ても仕方が無いので詰め所に向かいながら、
とぼとぼ歩いて無言が続いていた、夢の中（？）であんなことがあった後となれば、
誰だって気が滅入ると言うのもだ、溜息を禁じ得ない。
「俺、思ったんだけど」
「なんだよ」
ぽつりと呟いた恋次に返事をするのも億劫なのだが一応答える一護。

「更木隊長の最後まで持たない発言の本当の理由って、」
「本当の理由？　どういうことだ、そのままの意味じゃねぇってことか？」
どこにも不自然な点は無かったと思っていた一護は立ち止まってしまう。
少しだけ振り向き恋次は頬をぽりぽり掻きながら。
「例のアレのせいだと思うのは俺だけか」
「あ…」
確かに剣八の霊圧は眼帯で封をしているとは言え垂れ流れており、
一般人が傍に居ると倒れることも度々あったようだが、
どう考えても霊圧よりもそっちの問題の方が説得力がある。
風呂場で剣八の股間を見てしまったあの衝撃は今でも忘れられない（すごく忘れたい）
しかしながら、童貞の二人には想像で補うしか方法がなく、
本当の理由はどうなのか定かではない。
というより他人のテクなんて未知数だし二人には関係の無い話しである、
大きければ良いとも限らないし相手との相性も関係してくるのだから。
「実は早漏だったとか、逆にクソ遅漏だったとか、めちゃくちゃ下手だとか、
何かしらデメリットが無いと納得いかねぇ…」

「その点については激しく同意だ…」

ぼやく一護に恋次も頷き、歩き出した二人は同時に盛大な溜息を吐いたのだった。

終わり

05『鼎』

もう五度目です、三人は同時に溜息を吐いた。
だいたいのルールは把握しているものの、前回の指令は本当に酷かった…。
しかも実質サイコロの質問に答えたのは一護だけで、
白い部屋から脱出した後に気付いた一護はその不条理に地団駄を踏んだ。
前回は白い部屋の中央にコタツとみかんがあったのだが、
今回はみかんが無い、やちるへのお土産は無さそうでちょっと残念な剣八。
その代わりにスマホが置いてあった。
三人は仕方なくコタツに入って、機械類に強そうな一護がスマホを手にする。
「今回の指令はなんだろうなー」
棒読みだぞ一護。
「前回の件でもうだいぶ吹っ切れたけどな」
剣八の知らない一面を知ってしまったり（しかもエロ関係）
一護の好きな体位まで白状させられたので、恋次は項垂れるように呟いた。
「で、指令が書いてあるのか？」

みかんがなくて少しがっかりしてる剣八が一護の手元を覗き込む。
一護はスマホの電源を入れてみた、しばらくして画面が光ってホーム画面になる。
そこにはお馴染みの某アプリのアイコンがあり、一護は仕方なく緑のアイコンをタップ。
誰のスマホなのか分からないが友達として一人だけ登録されていた、
しかも名前が『指令』と書いてあるので分かりやすい。
『指令』をタップしてみると…。
ぺこっ！
変な音がしてそれと同時にメッセージが。
どうやら『指令』とメッセージのやりとりで指令を達成しなきゃいけないようだ、
ややこしい。
「なになに？　1、立ち…　なんて読むんだこれ」
分からない漢字が出てきたようでスマホの画面を剣八に見せる。
「立ち鼎（かなえ）だ」
「へー　初めて見たこんな漢字」
そうなんだーと素で感心している一護、しかし恋次は意味が分からなくて首を傾げた。

「書いてあんのそんだけか？」
「1、立ち鼎　としか書いてねーな、どういう意味だ」
　ぺこっ！
「お、メッセージきた、証拠写真で指令達成？　は？」
　一護も恋次も頭の上に大量の『？』を飛ばした。
　そんな中、剣八だけは苦虫を噛み潰して世界中の苦虫を全滅させる勢いである。
「剣八、意味が分かるのか？」
「そりゃ四十八手だ、1は立ち鼎」
　おお、どうやら剣八だけ意味を理解しているようだ。
「一護、恋次、立て」
「「へ???」」
「向かい合わせで抱き合え」
「「はぁああ!?」」
　剣八の意味不明な命令に一護と恋次は同時に叫んで身を乗り出す、
　だってまさか抱き合えとかどういうことなのか。
「ちょっと待てよ！なんで俺と恋次なんだよ！
　剣八と恋次がやればいいだろ!!」

「なんだと一護！　俺はお前なんかと抱き合うなんてぜってーヤダからな!!」
「そんなのこっちだって願い下げだ!!」
怒りに任せて叫ぶ二人、しかしここから脱出するには指令に従うしかない。
プイっと同時に反対方向へ顔を背けてしまった二人に剣八はひとつ溜息。
「分かった、どっちでもいいから立て、俺がやる」
そもそも一護と恋次が抱き合ったとして、そうなると写真を撮るのは剣八になる、
スマホなど一度も触ったことがない剣八にスマホを持たせるのはかなり不安だ、
しっかり写真を撮れるかどうか怪しい。
「俺だって指令に従うのは嫌なんだが、
達成しねーと出られねぇんじゃしょうがねぇ」
確かに剣八の言うとおりである、この白い部屋は剣八が殴っても壊れないのだから。
斬魄刀が無い今、指令に従う以外の道はなかった。
「俺やります、一護しっかり写真撮れよ」
「へいへい…」
白い部屋の出現によりそれぞれの性格がはっきりしてきた、
絶対的なルールがあるなら嫌でもそれに従わなければならないのだけれど、
護廷十三隊の縦社会でも嫌な仕事は必ずある、

副隊長として長年勤めてきた恋次は一護よりも少しだけ大人なのかもしれない。
前回のサイコロ事件も恋次が先陣を切ったし今回も。
目上の隊長格が腰を上げたことで恋次としてもやらない訳にはいかない。
「まぁ勉強だと思って頭の片隅に留めとけ」
「「勉強？」」
一護と恋次がきょとんと首を傾げたのを見て剣八は、
もしかしてと思ってぼりぼりと後頭部を掻く。
「なんだお前等、四十八手の意味も分かんねーのか」
「ああ、うん。　なんか流れで適当に…しじゅうなんとかってのは何のことだ？」
実は知らずに流されていた一護は困ったように笑う。
「前回サイコロの質問覚えてるか」
「え…　す、好きな体位…???」
「お前が自分で言ってたじゃねーか、体位は４８くらいあるんだろって、
四十八手はそいつのことだ」
「「エーーー!!??」」
一護と同じく恋次もびっくり！　四十八手ってそういう意味だったのか！
つまりここは、四十八手を知っている剣八が指南するしか無いのだ。

一護と恋次の二人だけでは指令をクリアできない。
「証拠写真って男同士でどうやって!?　剣八に突っ込まれたら死ぬぞ恋次!!」
「ひぃ…ッ！」
蒼白になる二人、と言うか何故剣八が突っ込む側なのか謎。
剣八は盛大に溜息を吐いた。
「……お前等バカだろ」
剣八だってまさか本気で恋次を抱く訳が無い、
そもそも男同士はかなり無理をしなければ不可能である。
なによりこの物語はＢＬじゃないです（念押し）
まぁ剣八は相手が女だろうが男だろうがどっちも可能な両刀で、
更にはタチ（攻め）だろうがネコ（受け）だろうがどっちも許容範囲だったりする。
残念ながら今まで一度も剣八をネコとして見る人間がどこにも居らず、
剣八がネコになったことは一度も無かった訳だが。
ある意味剣八のネコ姿を見てみたい気もする（情事の意味でもネコ耳姿も）
剣八は狼狽える恋次の腕を掴んで引き寄せ向かい合わせで引っ付く。
「立ち鼎は立ったまま向かい合わせで挿入する、
女の片足を男が持ち上げて支えるんだ、オラ持て」

「は　はひぃ!!」
身長差があるのでどっちが女役なのか恋次は混乱して片足を上げようと思ったが、
剣八が右足を上げて恋次の腰辺りにくっ付けて蹴りを入れているような体勢。
恋次はやっと把握して慌てて剣八の右太ももを持つ、
それを確認した剣八は恋次の背に腕を廻しぐっと腰を押し付ける。
身長差のせいで剣八の股間が恋次のへそ辺りに押し当てられ内心悲鳴ものだった。
「鼎ってのは三本足の釜のことだ、女が片足を上げることで鼎っぽくなる。
一護、写真」
「お、おう!」
パシャ☆
一護は焦りながら写真を撮りメッセージに写真を添付。
ぺこっ!
「2、ちどりのきょく?　ってことは、1は今の写真でＯＫみたいだ」
服を脱いだり実際に挿入しなくてもＯＫらしい。
何を思ったのか剣八は恋次を押し倒す勢いで白い床に引き倒す。
突然のことに対応できなかった恋次は目を白黒させた。
「千鳥の曲はようするに口淫だ。

女が寝そべった男の隣で口淫する姿が琴を弾いている様に見えるらしい」
言いながら剣八が恋次の股間辺りに顔を寄せる、これなんて地獄絵図!?
蒼白の恋次は指一本動かせない、あまりにも予想だにしない図すぎて。
唖然としていた一護は思い出したように写真を撮って添付する。
ぺこっ！
「3、立ち松葉？」
「めんどくせぇな…いくつまでやるんだ」
「俺に言うなよ、指令が来るんだから」
「おい恋次、足上げろ」
「へ???」
今度は両足を掴まれ引っ張られる、まるで剣八のオモチャ状態である。
しかし立ち松葉は二人が力を合わせないとなかなか難しい体位で、
四十八手の中で群を抜いてアクロバティックな体位として有名。
それを分かっていて剣八は面倒だと思ったのだ。
剣八は恋次の両足をかなり引っ張り上げて持って開かせ、
更にそれを跨ぐように股間と股間をくっ付ける。
（酷い絵だ…）

段々冷静を取り戻した一護は、目の前の図に思わず心の中で突っ込んだ。
だってまるでプロレスの技みたいで情事とは掛け離れているように感じる、
男同士だからそう見えるのか？　それとも剣八と恋次だからそう見えるのか？
「立ち松葉は見ての通り変な体勢だが、
男は上下じゃなく円を描くように腰を動かすのがポイントだ」
「へぇ…」
単純にピストンするのではなく円を描くように動かしたり前後することで、
膣内をぐるりと掻き回すようなイメージらしい。
良く考えたらこれはこれで勉強になる、実際に実践するかどうかは分からないが、
無知でいるより多少は知識を蓄えていても損はないだろう。
「い、いちご！次代われ！」
どうやら体勢が辛いらしい、なんせ足を引っ張られさかさまになっているのだから。
恋次は蒼白なだけでなく泣きそうな顔で叫んだ。
急いで写真を撮って添付するとまたもや指令が…。
「4、みやま…でいいのか？　ほんとこれいくつまでなんだろ…」
「一護！」
「あー　分かった分かった、ほれスマホ」

這いずって一護のところまで来た恋次にスマホを渡す、
仮にも現世に降りたことのある死神だから伝令神機を扱ったことがあるだろう。
以前は二つ折りだったが最近ではスマホ型に移行しているらしい。
「で、深山ってのはどうすればいいんだ？」
「寝転んで足を上げろ」
「こうか？　うわぁ！」
一護は剣八の言う通りに寝転んで足を上げる、
しかし剣八が一護の腰を掴んで少し引っ張り上げたことで変な声が出た。
一護の腰が浮いたところに剣八の太ももが差し込まれ、
以前一護が白状した腰高正常位に近い体勢になる。
そこから更に剣八は一護の足を持ち上げ己の肩に添え、
尚且つ一護の腰を掴んでぐっと腰をくっ付ける。
いい加減、アレとアレが密着しそうで物凄く嫌なんだけど、
幸い死覇装がわりと厚い生地なので助かっている。
「深山は奥が好きな女にやってやれ、この体位なら子宮口まで届くはずだ。　次！」
剣八が怒ったように先を促すので恋次は素早く写真を撮り添付した、
するとやっぱりまた次の指令が…。

ぺこっ！

「5、立ちはな…びし？　いつまで続くんだよ…勘弁してくれよ…」

もう本気で泣きたい恋次の声はめちゃくちゃ震えていた。

「立ち花菱だな」

言いつつ剣八はきょろきょろした、寝転んだままの一護は不思議に見上げる。

立ち花菱は枕などの道具を使うため剣八は枕を探したようだ、

名前も知らないし体位も知らない一護は起き上がろうとしたが、

剣八に肩を押され白い床に後頭部を打ち付けてしまう。

「いってぇ…！　おい剣八！」

「わりぃ、枕がねーかと思って」

「???」

しかし白い部屋にはコタツとスマホしかない。

仕方なく剣八は隊首羽織を脱いでぐるぐると丸めてしまった、

隊長格が羽織ることを義務付けられている隊長の羽織りを、

そんなぞんざいに扱うなどもってのほかなのだけれど、

ここには三人しな居ないし、元々剣八は隊首羽織の扱いは雑である。

丸めた隊首羽織を一護の腰の下に差し込んで、やや腰を浮かせた状態に。

「体位の中には千鳥の曲みたいに挿入以外にもある、
立ち花菱は女に対する愛撫のひとつで、
こうすることで男もやりやすくなる」
一護の両足をしっかりと持ち股間に顔を寄せる剣八、
立ち花菱は女性器を舐めたりするため腰を浮かせる体位。
股の間から剣八の顔が見えるという未知の遭遇に一護は真っ青になった。
男にこんなことされて若干傷付く。
青い顔して泣きそうな一護を写真に撮って添付すればきっと次の指令が…。
「あれ？」
恋次の間抜けな声が落ちた。
さっきまでの流れでいけば次の指令が来るはずである、
しかし新しいメッセージは来ない…もしかして失敗したのか？
「れ、れんじ、つぎ　かわって…」
男として精神的ダメージを受けた一護の声はすこぶる情けない。
「と言うか、次は無理だぞ」
「へ？」
今まで細かい説明を交えつつ体位を教えてくれたのに、

今度は剣八がギブアップなのか？　だとしたら一体誰に体位を教わればいいのやら。
「恐らく次は鵯越えの逆落としだろ、立ち松葉同様ひどい体勢になる」
「ど、どうすんだよ、てか指令もどうなってんだよ」
なんとか起き上がった一護、恋次が写真を添付しても次の指令が来ないし、
リアルに戻るなら部屋が光に包まれるはずなのに…。
「さっきの失敗だったのか？　もうヤダよこんなの」
本気で泣きそうな一護。
すると…ぺこっ！とメッセージが来た。
次の指令かと思って画面を見れば『指令達成！』の文字だった。
「やったー！指令達成!!」
めちゃくちゃ嬉しそうに恋次がガッツポーズをしたことで、
やっと一護の顔に希望に光が差し込んだ。
「ふう…」
剣八としても指令達成は安心したようで胸を撫で下ろす、
なんせ次の体位は女役にかなりの負担が掛かるからだ。
それをやらなくて済むなら願っても無い。
ぺこっ！

「「え？」」」
指令を達成したのだから帰れるだろうと思っていたら、
新着メッセージの音が聞こえて三人同時に素っ頓狂な声が漏れた。
三人でスマホを覗き込むと…。
『続きは次回！』
「「ふざけんな!!」」
三人そろって全力で叫んだ。
続きは次回って、四十八手全部やらなきゃいけないのか？
これ以上精神的ダメージは負いたくない、せめて女の子用意してよ…。
いやしかし、それはそれで恥ずかしいからやっぱり却下で。
「四十八手の全部やらせるつもりらしいな、コタツあるし」
え？　剣八の言葉に一護と恋次は首を傾げた。
「四十八手の中にはコタツを使う体位がふたつある」
「マジか…」
一護は震える声で呟き恋次は蒼白で言葉を失った。
「四十八手って大変なんだな…」
素直な感想が零れ落ち剣八も溜息を吐いたのだった。

「てか剣八、四十八手なんて良く知ってるな」
「遊郭に行った時に教えてもらった。
女の好みは人それぞれだから色々試してみるのに丁度いいだろうって。
中には膣より尻の方がイキやすい女も居るくらいだしな」
一護と恋次はまだ若い、まさか尻の方も気持ちいい人が居るなんて驚きだった。
二人がなんとも解せないような顔をしているので剣八は肩を竦め。
「尻の方から子宮を刺激すんだ、
膣内とは違った角度からの刺激で普段とは違う快楽らしい、
まぁアブノーマルなことしてるっていう羞恥も相俟ってんだろ」
さすがに尻への挿入はかなり無理があるのでやれるとしても指で刺激するしかない。
「じゃあ剣八は、」
「やめろ一護!」
「あ、うん。やめとくわ」
素で疑問に思って一護は剣八にうっかりやったことがあるのか聞こうとしたが、
恋次に止められ我に返り素直にやめる。
もしここでやったことがあるのか聞いて、答えが返ってきたら恐ろしい。
「てか、指令達成したのに光らないな」

「言われてみりゃ…　いつ戻れるんだ？」
一護が白い部屋を見渡してきょろきょろ、恋次も釣られてきょろきょろ。
すると遠くの方から誰かの声が聞こえてきた。
「なんだぁ？」
剣八の訝しむ声がひっそりと這う。
――隊長！　更木隊長!!
誰かは分からないが男の声で剣八を呼ぶ声。
一体誰の声なのか三人は顔を見合わせる、その瞬間だった。
光に包まれ眩しくて目を瞑り、恐る恐る開けてみたら…十一番隊の詰め所にある執務室。
戸が何度もノックされてちょっとうるさい。
「更木隊長！いらっしゃいますか!?」
「誰だ」
「失礼します！」
剣八が答えると男が戸を開けた、そこには何故か顔を真っ青にさせた檜佐木の姿。
正直剣八とはあまり接点が無いこの男が一体剣八に何の用なのか、
しかも真っ青になってる意味が分からない。

「大変です更木隊長！」
「だからなんだ」
「瀞霊廷通信宛にとんでもない写真が届いたんです!!」
嫌な予感がする。
あたふたと檜佐木が机の上に写真を置いた、きっちり5枚。
「一体何があったんですか!?」
答えられる訳がない、と言うか説明したところで檜佐木には理解できまい。
しかも執務室には一護と恋次も揃っていて檜佐木は小さく悲鳴を上げた。
机に置かれた写真は勿論先程撮った写真、
もしかして部屋が光に包まれるまでの誤差はこのためだったのか。
剣八は写真をぐしゃっと掴んでぎゅーっと握り締める。
「写真のことは忘れろ」
「は、はいー!!!」
剣八があまりにも凄んで低く言うので檜佐木は震え上がり返事が裏返る。
「なんで瀞霊廷通信に写真が送られたんだ…」
「マジで意味不明」
恋次と一護の溜息交じりの言葉に檜佐木はやっぱり事実なんだと思い知る、

もしかしたら合成かもしれない可能性が遠回しに却下されたことで、
実際にこの三人が四十八手の1から5をやったのだと知りたくも無いのに知るハメに。
しかも中には剣八が…護廷十三隊の最強戦闘部隊の隊長がネコになってなかったか？
三人が四十八手を演じた（？）のも驚きだが、
剣八が受け手に廻っていたことが一番の驚きだった。
性から掛け離れている男がそれらしい仕草や動作をしていると、
見たことが無い人間にとって衝撃的であることには変わりない。
忘れろと言われたし写真も握り潰されてしまったので、
檜佐木はしょんぼりと執務室から出て行く。
剣八に報告しなければスクープだったかもしれないのに、
後が怖いのできっとこれで良かったんだ、人が良すぎる檜佐木。
剣八は握り締めた写真を忌々しくゴミ箱にぶん投げ捨てた。
白い部屋で指令の最後に『続きは次回！』と書いてあったので、
きっとまたあの白い部屋に強制連行されるのだろう。
尚且つ続きをやらされるに違いない未来にうんざりした。

もっと楽しいことなら良いのに、一護や恋次と戦うとか。
「つまんねえなぁ…」
思わずぽつりと独り言つ。
しかしながら、剣八と戦うことになれば一護も恋次も楽しいとは限らない、寧ろしんどいから勘弁してくれと断られること請け合いである。
もっと言えば白い部屋では斬魄刀が取り上げられるので戦うことなどできないのだが。
「おい一護、ちょいと俺と戦っていけ」
「遠慮しておきます!!!」
やっぱり即座に断られ剣八は肩を落としたのだった。

終わり

０６『ウサ耳』

はーい六度目でーす！　ここまできたら三人は諦めの境地である。
前回白い部屋で無理矢理四十八手の１から５をやらされ、
更に『続きは次回！』と宣言までされていた。
今回は続きからなのかと思っていたらコタツもスマホも見当たらない、
その代わりに置いてあったのは…。
「今日は続きをやらなくてもいいのか」
心底ほっとして一護は笑顔まで浮かぶ始末。
「てか、これ…」
部屋の中央に置いてあったブツを拾い上げた恋次は半笑い。
なんせ時期でもないのにハロウィンの仮装で使うようなウサ耳（黒）だったからだ。
某有名な雑誌のウサ耳に似ている。
恋次でなくとも半笑いになること請け合いだろう。
もしかしたら前回の続きは、三人が大反対だったから取り止めになったのかもしれない。

「まさかこれを着けろってことなのか?」
しかしウサ耳はひとつしかない、三人の内誰か一人が犠牲になるしかないようだ。
当然ウサ耳など着けたがる男は一人も居ない。
拾い上げてしまった恋次は徐に一護へ向かってウサ耳を差し出す。
「ここは主人公がやるべきだろ」
「こんな時だけ主人公扱いかよ!?」
主人公だからとウサ耳を押し付けられるのは御免である。
三人の内の一人だけ犠牲になるならば、やはりじゃんけんで決めるしか…。
しかし恋次は思う、もし剣八が負けてしまったら大変なことになる（見た目的な意味で）
いかつくて強面で冗談には一切関わらない鬼神にウサ耳など言語道断！
もしそうなってしまったら腹を抱えて笑う自信がある。
ここは恋次が阻止するしかなさそうだ。
「公平にじゃんけんするしかねーな」
「ま、待て一護、考え直せ！」
「なんでだよ、それが理不尽にウサ耳押し付けてきた奴の台詞かよ」
恋次は慌てて一護の肩を抱き込み剣八に背を向け内緒話。

「(良く考えろよ、更木隊長がウサ耳とか考えただけで笑わない自信が微塵もねぇ！)」
「(そうは言っても…俺とお前のどっちかなんて不公平じゃねぇか)」
一護の言うことも尤もなのだが…。
二人が内緒話をしているのを見て剣八はゆっくりと近付き、
なんと恋次の手からウサ耳を奪ってしまった。
「ざ、更木隊長…？」
狼狽える恋次、まさか自らウサ耳を装着しようと言うのか!?
「お前等が嫌がってるなら俺が着ける、さっさと終わらせて帰るぞ」
なんと三人の中で一番常識から掛け離れている剣八が、
一番まともなことを言うので一護も恋次も呆気に取られ、
驚き過ぎて口を開けたまま剣八を凝視。
「黒色だからきっと俺への指令なんだろ」
やっと我に返る二人。
剣八の言うようにウサ耳は黒色である。
一護はオレンジだし恋次は赤パインで黒いウサ耳はどうやっても合わない。
唯一黒髪なのは剣八だけなのだ。
「指令を出す奴はとんだチャレンジャーだな…」

恋次、本音がぽろり。
白い部屋から早く脱出したいのは三人とも総意なので、
剣八は迷うことなくその頭にウサ耳（カチューシャ）をかぽっと装着！
「…」
「…」
「…」
特に何も起こらない。
と言うか、剣八の頭にウサ耳…物凄い光景に一護と恋次は咄嗟に口を両手で押さえた。
あまりにも未知なる（酷い）ギャップが最大級で笑わずにはいられない。
似合わなさ過ぎにも程がある!!　似合う男も早々居ないと思うが。
剣八としては、ウサ耳を着けることで笑われるのは予想していたし、
笑われたってなんとも思わない性格なのだけれど、
二人が必死に笑わないように視線を泳がせているのを見て不憫になった。
「笑ってもいいんだぞ」
「い、いや、せっかく剣八が犠牲になってくれたのに笑うなんて…ッ！」
一護はなんとか喋ったけど最後は我慢できずに腹を抱えて蹲ってしまった。

恋次も同じように笑いを堪え床に土下座する勢いで剣八を視界から排除した。
しかも剣八が少しでも喋ったり動いたりすると、
それに連動してウサ耳がぴょこぴょこするもんだから余計に笑ってしまう。
一頻り笑いを堪えていた恋次はなんとか起き上がって。
「更木隊長、なんか異変とかありませんか？」
半笑いだぞ恋次。
「特にねぇな」
だとしたら今回の指令は一体なんだったのか。
今までの流れから言って、ただウサ耳を着けることだけとは思えないのだが。
すると突然剣八が何かに気付いたようにはっとしてくるりと反転してしまった。
異変は無いと言っていたが本当に大丈夫だろうか。
「おい、剣八…？」
突然二人に背を向けたのでどうしたんだろうと一護は不安になる。
「わりぃ、俺に構うな」
「え？」
何故謝るのか分からないが、剣八は二人から距離を取って部屋の隅に移動。
ゆっくり歩く度にウサ耳が揺れてまたもや笑いを誘う、

だが剣八が普段とは違う行動をすることで二人は更に不安を煽られる。
「お、おい、大丈夫なのか？」
構うなとは言われたけれど、犠牲になってくれた後ろめたさもあり、
一護と恋次は剣八を追い掛け部屋の隅に来る。
「指令が何か分かんねぇ以上、無駄なことは避けてぇ」
どういう意味なのか全く分からない。
しかし剣八は恐らく異変に襲われているのだろう、でなければ謝ったりしないはずだ。
顔だけ振り向いた剣八はいつになく険しい表情で。
「俺の半径２ｍに入るな」
言われて一護と恋次はその瞬発力を生かして素早く距離を取った。
「どういうことだよ？」
剣八の意味不明な言葉に冷や汗が流れ落ち、
ウサ耳とか馬鹿げたオモチャを笑う余裕すら無くなる。
ごめんやっぱりちょっとだけ笑う。
「説明を願います更木隊長」
恋次はごくりと喉を鳴らし剣八に進言した。

「勃起してんだよ」
「「……は？」」
「だから、これ着けた途端に勃起して、」
「ちょ　ちょ　待って！せめてオブラートに包んで！」
おぶらーとってなんだ…と剣八は真顔。
あまりの事態に一護は動揺し、恋次は蒼白になって言葉を失い棒立ち。
剣八は溜息を吐いて床に腰を下ろし胡坐を組んで座り込む。
と言うか、何故に勃起???
こちらに背を向けているので二人には見えていないけれど、
剣八は反応している下半身を見ることなく項垂れる、その拍子にウサ耳も揺れる。
「ウサ耳を着けるとなんで勃つんだ…？」
一護が素で首を傾げる。
「恐らくだが、ウサギは年中発情期だからじゃねーのか」
「そうなの!?」
知らなかった豆知識を剣八に教えてもらって飛び上がる勢いで驚いた。
ウサギは動物の中で最も繁殖力が高く、
某雑誌もウサギの性欲が強いことを加味していたのかもしれない。

「やっぱりウサギになっちゃったんですね…」
恋次は蒼白で呟く。ウサ耳剣八じゃなくてバニー剣八ですね。
しかしそこでひとつ疑問が、この際勃起してしまったのは仕方ないとして、
何故剣八は距離を取れと言ったのだろう、それが分からない二人。
勃起しているのを服の上からとは言え見られたくないのは分かるのだが、
半径２ｍも距離を取らなければならない理由に果たして成り得るだろうか。
「治まるのを待つしかねーか…」
「だな…」
一護と恋次の声に剣八の肩が揺れた、ウサ耳も揺れる。
「喋るな」
「!!」
そこまで切羽詰っているのだろうか。
背が高くガタイの良い剣八が座り込んで逞しく広い背中が今は頼りなく見えた。
いつもは堂々と胸を張りその強さを誇示していると言うのに、
頭には超絶似合わないウサ耳があるし誰特なんだと疑問しか無いのだけれど、
犠牲になってくれた剣八に申し訳ないし、二人は黙ってなんとなく座った。
無駄に過ぎていく時間、白い部屋には三人の呼吸音しか無い。

けれども、剣八は勃起していることを二人には言ったが、
実は常人であれば気が狂う程の欲情の昂ぶりを押し上げられていた。
段々と呼吸の間隔が短くなっていく、このままでは二人が居ようと構わずに、
擦り上げてしまいたい衝動に駆られている。
これほどまでの衝動は、きっと剣八でなければ耐えられないだろう。
寧ろ…。
（やべぇな…）
内心焦っている剣八はどうにか二人から意識を外し、
二人の内どちらかがウサ耳を着けなくて良かったと安堵していた。
しかしながら、このままでは非常にまずい。
剣八は女だろうが男だろうがどっちでも構わない両刀で、
尚且つタチでもネコでもどっちも可能であるため、
もしかしたら二人に願ってしまいそうで焦っている。
半径２ｍと咄嗟に言ってしまったが、本当ならもっと距離を取って、
姿が見えないくらいに離れて欲しいのだけれど、
如何せん部屋が１２畳ほどなのでそれは不可能だった。
剣八は試しに頭にあるウサ耳を掴んで引っ張ってみる、

けれどウサ耳は接着剤で着けたかのように取れなかった。
まるで頭皮に深く根付いているような感覚…いよいよまずくなってきた。
ウサ耳が取れないと分かり剣八は深々と溜息を吐く、
その熱に浮かされた吐息に一護と恋次は顔を見合わせる。
本当のことを言うと、常識から逸脱している剣八が、
自分達と同じく欲情を携えていることが信じられないと言うか、
なんだか不思議な感覚しかなかった。
超人のような、人ではない何かであるような、
そんな男にも人間の三大欲求が存在していることへの驚きと言えばいいだろうか。
以前童貞ではないと言っていたし、事実四十八手を知っていたし、
遊郭に行ったことがあるのは確実なのに、何故だか性行為と結び付かないのだ。
「なぁ剣八」
「…っ！」
一護の問い掛けに剣八の肩が揺れてウサ耳も揺れる。
「そんなに辛いなら抜けよ」
「…喋るなって聞こえなかったか」
「だから、ここには三人しか居ないんだし、

俺も恋次もあっちで耳を塞いでおくから…」
辛いのは事実だけれど、剣八は二人に願ってしまいそうな自分を見られたくないし、うっかり口が滑らないとも限らない、なんせ今まで遣りたいように遣ってきたのだから。
今までの刃生（じんせい）で我慢などしてこなかった、
戦いたいから戦ってきた、戦うために隊長にまでなった、
戦う理由のために『剣八』を奪い取った、そんな男が果たして我慢などできようか。
すると恋次がすっと立ち上がった、拳を握りながら。
「更木隊長、なんなら俺が手伝います」
「おい恋次!?」
「だってこのままってのも更木隊長に失礼だろ?!
ウサ耳の犠牲になってもらって、俺達は何もできないなんて…」
「確かにそうだけど、手伝うって言っても…」
男の自慰に手伝うもクソも無いだろう。
恋次は恐る恐る剣八の背に近付いて両手を伸ばす、
そして若干揺れているウサ耳をぎゅっと掴んだ、その瞬間。
「〜〜〜っ!!!」

なんと剣八が片手で口を押さえビクっと身体を強張らせたのだ、
驚いた恋次は手を離す、一体何が起こったのか分からない。
「さ、触んな…っ！」
「でも引っ張らないと取れないじゃないですか！」
一護も恋次もウサ耳を着けていないので分からないが、
ウサ耳は既に剣八の一部になっていて恋次が握った感覚がダイレクトに伝わってきたのだ。
しかも運の悪いことに性感帯かと思うくらいの快楽が襲ったため、
剣八は危うく甘い声が出そうになって口を手で押さえたにすぎない。
まさか剣八がこんなに動揺しているなど初めて見る二人、
その動揺が二人にも感染して冷や汗がだらだら流れ落ちる。
これはもしかして、本当にまずい状況なんじゃないだろうか、
一護も立ち上がって恋次と目配せる、ゆっくりと頷き手を伸ばし…。
「～～～やめろ…!!」
二人が同時にウサ耳を掴んだ瞬間に、聞いたこともない剣八の声が白い部屋に響いた。
それは普段のいかつく、低い地を這うドスの利いたバスではなく、

まるでテノールのような高い音域の鼻から抜ける声だったから、
二人は驚きすぎてウサ耳から手を離してしまった。
流石に裏声を駆使するカウンターテノールほどではなかったけれど。
そこで二人はまたもや未知なる違和感を覚えた、
普段から顔を合わせれば戦えと理不尽なことを言ってくる剣八に、
今までの鬱憤を晴らせと言わんばかりのマウンティング。
最強を欲しいままにしている兇刃の鬼を、戦い以外で負かせるかもしれない好機。
そう、二人はウサ耳を着けて身動きが取れない剣八に対し、
過去に無い程の優越感を覚えてしまったのだ。
もし一護と恋次が妙なことをしても、今の剣八は動けないし反撃もきっとできない、
けれど、これが逆だったらと思うとぞっとするので、
流石に二人は今の剣八に仕返し（？）をしようとは思わなかった、後が怖いから。
どうすることもできない二人、その頼もしい肩が震えているのを見てしまっては、
本当に何もできないしもう一度ウサ耳を引っ張るのも無理そうだ。
徐々に剣八は身体が傾いでいく、両手で己を抱き締めてゆっくりと床に沈んだ。
身悶えているのか背を丸め両足を擦り合わせ、間隔の狭い苦しそうな熱い吐息、
これが女だったらどれだけ扇情的なことか。

「…頼むから、はなれてくれ」
二人は剣八の弱々しいキーの高い声に頷いて少し離れる。
正直、男の喘ぎとか快楽に身悶えている姿を見るのは嫌悪の対象だ、
しかしどういう訳か二人には嫌悪感はあまりなかった。
そもそも剣八を超人のように感じていた節があるため、
人として、自分達と同じ普通の男性としての認識がなかったせいで、
なんだか得体の知れない複雑なマーブル状の色を見ているようだった。
訳の分からない緊張と恐怖に襲われ酷く喉が渇く。
あの何者にも負けない斬っても倒れないバケモノの剣八が、
こんな姿になっているなど悪い夢でも見ているようだ。
ただ時間が過ぎることでしか指令を達成できないのだろうか、
せめて何かしらの指示があればいいのに…。
（クソったれが…っ！）
剣八の身体は思考とは裏腹に甘く熱く融け堕ちていく。
僅かな隙で簡単に揺らいでしまう己の自制心に奥歯を噛む、
こんなに脆いとは思わなかった、どんなことがあっても醜態を晒すなど考えたくもない。

そして思う、男色などという二人には相応しくない道に引きずり込んではいけない、
だからこそ二人に手を伸ばし縋ってはいけない。
いくら剣八が両刀でタチもネコも可能だったとしても、
恋愛感情抜きで身体の関係を迫るなんて大人として一番やっちゃいけないことだ。
今まで自分は恋愛などしてこなかったし、恋愛感情抜きで身体の関係を持ったことがある、
遊郭がそれに当たる、そんな関係を全く関係ない二人に押し付けるなどできる訳が無い。
一護が言うように抜くのが一番の手立てなのだろうけど、
しかしやはり人前で自慰など以ての外である。
ここは歯を食い縛り指令達成まで辛抱するしかないのだ。
でも分かる、先走りが溢れて下帯がぐちゃぐちゃに濡れてる不快感、
少しでも擦れるとそれが快楽に摩り替わる。
思考さえ吹っ飛びそうなどろどろとした熱が背中の奥から這い上がってきて、
目を閉じているのに細胞のひとつひとつが七色の光となりチカチカと飛散し眩しい。
血液が逆流したかのように全身が溶融する震えが止まらない、
少しでも気を緩めたら甘く切ない声が零れ落ちそうだ。

プライドもクソもない、何もかも放り投げて縋ってしまいそうな惨めな自分。
もう無理だ、どうにかなっちまいそうだ、
股間に手が伸びてしまいそう、早く終わってくれ！
ガラン！
突然響いた重たい金属音に三人はビクー！と硬直した。
剣八は危うく射精しそうになったが何とか堪える。
「あー！俺の斬魄刀!!」
そう、そこには一護の斬月。
ガラガラン!!
「蛇尾丸ー!!」
次々と斬魄刀が床に転がり落ちる、蛇尾丸だけでなく剣八の斬魄刀まで。
なんだっていきなり三人の斬魄刀が？
もしかして戦えということなのだろうか、だが剣八は戦いたくてもそんな状態じゃない。
一番の楽しみである戦いができないなんてそんなのあんまりだ！
「クソ…!!」
剣八は熱に犯されている身体を引き摺ってなんとか斬魄刀に手を伸ばすが、

距離があるため届かないし指先すら掠めない、一護と恋次はそれぞれの斬魄刀を取って。
「剣八、動くな！」
「は？」
一護の声に顔を上げた瞬間、一護は何故かバッターボックスに入った打者よろしく、斬月を大きく振りかぶっていた！
ちなみに恋次は察して一護から距離を取っている。
だが剣八だって腐っても死神だ、動くなと言われていたのに咄嗟に起き上がり、無意識に斬魄刀を掴んで一護と対峙してしまう。
戦う本能だけで生きている流石剣八、欲情よりも本能が上回ったようだ。
「動くなっつったろ馬鹿！ウサ耳切り落とそうと思ったのに！」
「あ…すまん、なんかつい…」
「てかほんとに勃ってたんだな…」
「ああ、まぁ…」
そそくさと反転する剣八、二人に見られてしまった、ちょっと恥ずかしい。
（俺にも羞恥ってあったのか…）などと感心している場合ではない。
後を向いている剣八に向かってもう一度斬月を振り下ろす！

けれども、剣八は本能という癖でそれを避けてしまった。
「動くなよ?!」
「知らねぇよ勝手に動くんだよ!」
殺気の欠片もない斬撃を避けるのは剣八にとって朝飯前である。
二人の遣り取りを見ていた恋次はピンと来た。
「更木隊長、すんません!!」
言いながら恋次まで剣八に斬魄刀を向けた、
剣八は流れる動きで恋次の蛇尾丸を斬魄刀で受け止めて、
その隙を突いて一護が斬月で剣八のウサ耳を切り落と…せなかった。
剣八は斬魄刀で恋次の蛇尾丸を受け止めているがそれは右手、
空いている左手で一護の斬月を素手で受け止めてしまったのだ。
もうここまでくると本能って言うよりコントである。
「なんで止めちまうんだよ剣八!!」
「うるせぇ!!こっちだって身体が勝手に動いて困ってんだ!!」
しかも反応したままの股間を隠せないので二人にモロバレ。
いくら死覇装を着ていても剣八のアレがソレなので丸分かり。
大きいからと言って得をするとは限らない。

戦いの本能とは末恐ろしい…。
「いいか剣八、絶対に動くなよ!?」
「…おう」
剣八は返事をしながら斬魄刀を腰に納刀した、これで二人の攻撃を防ぐことはないだろう。
「おりゃー!!」
変な声を上げながら一護が振りかぶって思いっきりウサ耳を振り薙いだ。
ぱさ。　軽い音と共に落ちるウサ耳。
まだ根元のカチューシャ部分は頭に残っているが、
身体の一部になっていたウサ耳は痛みもなく白い床に落ち、
剣八の身体から嘘みたいに欲情が綺麗さっぱり消え去ってくれた。
「更木隊長股間は大丈夫ですか!?」
恋次に問われ剣八は股間を片手で押さえる、軽く触って確認。
「……大丈夫みてぇだ、勃起も治まったし欲情も消えた」
「良かった～!!」
しかし酷い会話だ。
今回の指令はきっと剣八の限界と連動していたのだろう、

もう無理だと心の中で叫んだことにより斬魄刀が落ちてきたのだから。
未だに下半身はぐちゃぐちゃに濡れてて最悪だが、
リアルに戻ったら直ぐにでも風呂に入ろう。
勃起しているのを服の上から見られただけで、
先走りでぬるぬるな下半身を直接見られた訳ではないし剣八としては許容範囲。
ウサ耳を二人が装着しなくて良かったと心底思った、
きっと剣八でなければあの暴力的な欲情を抑えられなかっただろう。
子供とは言わないが身も心もまだまだガキの二人には酷すぎる快楽への渇望だった。
ああ、眩しい。
今までリアルに戻る光がこんなに嬉しくて安堵したのは初めてだった。

終わり

０７『赤いシグナル』

数えるのも億劫ですが七度目です、白い部屋にはいつもの三人…おや？
「ぎゃあああああ!!!」
突然一護が叫んで咄嗟に恋次の背後に隠れた。
恋次も剣八も頭の上に大きな『？』を浮かべる。
「おい一護、どうしたんだよ？」
「どうしたもこうしたもあるか！
なんで更木剣八が居るんだよふざけんな!!」
「…」
「…」
なんでと言われても、もう七度目だしいい加減に慣れてきた頃である。
そこで恋次はもしかして…と背後の一護を見遣る。
死覇装姿ではない一護は学校の制服を着ていた。
「お前…コンか」
「そーだよ！拉致監禁はんたーい!!」

実はコン、以前花太郎の身体を奪って尸魂界に行ったことがある、
その時に強いと勘違いした剣八に追い掛け回されたことがあるのだ。
だからコンは剣八恐怖症になってしまった、そもそも剣八の顔が怖い。
追い掛けられるのは特盛りの女子なら大歓迎だがそれ以外は断固拒否。
しかし白い部屋では斬魄刀が取り上げられているので、
剣八が襲ってくることはまず無いだろう。
「今回は間違って一護じゃなくてコンが強制連行されたか…」
「はあ？　何訳分かんないこと言ってんだお前」
「今まで何度もこの部屋に拉致られてんだよ、七回目かな」
「そんなの聞いてねぇぞ!?」
恐らく一護はコンに白い部屋のことは話していなかったようだ。
コンは怯えつつも恋次の影からこっそりと剣八を見上げて、
丁度目が合ったのか小さく悲鳴を上げてササっと再び恋次の後に隠れる。
「てか、この白い部屋はなんなんだよ」
コンの疑問に答えられる人間は一人も居ない。
恋次も剣八も同時に溜息を吐いた、分かっていたら苦労しない。
しかも時を選ばず強制連行されるので、恋次は書類仕事の途中だったし、

剣八は執務室で昼寝しようと（仕事しろ）ソファに寝転んだ瞬間に飛ばされ機嫌が悪い。
前回の指令を思い出して益々頭が痛くなったとも言える。
あれはマジで一番苦痛だった…と剣八は思っているのだが、
そんなことを言ったら一護と恋次を怖がらせてしまうし、
二人が被害に合わなかっただけマシと言うか、
自分だけが痛い目を見て指令達成されたのだからそれが最良だったと思っている。
いちいち説明するのもめんどくさいと言うのが本音。
「毎回指令をクリアしないと部屋から出られねぇんだ」
「は!?マジで!?」
「今回の指令はなんだろうな…」
驚いているコンを放置して恋次は部屋を歩き回り指令を探す、
コンは剣八が怖いので恋次に引っ付いてまるで親鳥と雛鳥みたいだ。
「おいコン！邪魔だから離れろよ！」
「うっせぇ！こっちは生死が掛かってんだぞコノヤロー！」
「いくらなんでも殺しはしないだろ更木隊長だって…」
「死に掛けたぞ俺。

更木に追い掛けられて逃げ回ってやっと魅惑のふわふわボディに戻った途端、
やちるに犬饅頭とか言われて食べられて涎まみれになったんだからな!!」
そんなことがあったのか…と恋次は苦虫を噛み潰す。
どうせ特盛り目当ての行動でそういう結果になったのだろう、自業自得じゃねぇか…。
「とにかく！　お前も探せ、いいな」
「めんどくせぇ…」
うんざりしながら答えたコン、同じ部屋に剣八が居るせいか素直に従う。
しばらく恋次とコンが部屋を歩き回っていると軽い音が聞こえて顔を上げる。
ぱさっと落ちてきたのは黒いウサ耳。
「ウサ耳???」
コンが素っ頓狂な声を上げたが、剣八が一目散にウサ耳を拾った。
「ウサ耳に触るな」
「え、なに、更木ってウサ耳フェチ?」
前回の指令を知らないコンはめちゃくちゃ動揺した、
だって強面で冗談が一切通じないような兇刃の鬼が、
一目散にウサ耳を拾って懐にしのばせるなんて有り得ない光景だ。

見当違いなコンの発言に剣八がぎろりと睨み、コンは恐ろしくて青ざめ硬直。
そんなにウサ耳が好きなのかと勘違いされている剣八。
本当はウサ耳がとても危険なため剣八が咄嗟に拾って危険を回避したのだが、
恋次も実際にウサ耳を装着した訳ではないので、
どれほど恐ろしいモノなのか真実は知らない。
だが、最強戦闘部隊の更木隊長があんなに参っていたのを間近で見ていたから、
きっと自分では耐えられない危険なのだろうと解釈している。
すると突然コンの頭を誰かがわしっと掴んで手動金剛輪。
「ところでテメェ誰だ」
「痛い！痛い！暴力反対!!」
涙目で訴えるコン、必死すぎて可哀想。
「あれ？更木隊長は会うの初めてでしたっけ？」
「俺は二度目だ！俺が強いと勘違いして追いかけてきやがって!!
あ、いや、その…追いかけてきやがりまして…あれっ　敬語にならねぇ!?」
剣八に手動自力金剛輪をかまされているので痛いし怖いし混乱して敬語が吹っ飛んでいる。
「一護じゃねぇのか…」

見た目こそ一護だが中身は義魂丸（改造魂魄）のコンである。
一護本人じゃないと分かった途端になんとなく気分が落ちていく、
斬魄刀さえあれば一護と戦いたいのに勿体無い。
「覚えてませんかね、現世で一護にくっ付いてたライオンのぬいぐるみ」
「……あったような、なかったような」
「本人を目の前にして存在を曖昧にするとは失礼千万だなオイ!?」
恋次が問い掛け剣八が首を捻って答えコンが突っ込む。
まるでお笑い芸人のような三人。
そうこうしている内に次の落下物、今回の指令は落下物の回避なのか？
コロン！
プラスチックとかシリコンとか軽そうな音。
落ちてきたのは赤い物体だった、近くに居た剣八はコンから自力金剛輪を外し、
赤い物体を拾い上げてみる、見たことも無い品物だった。
「なんだこりゃ？」
「なんすかね…俺も見たことないです」
剣八が首を傾げ恋次も頭を捻る、しかしコンだけは青ざめていた。
「テメェ、これが何か知ってんのか」

「てか寧ろ知らねぇのか!?」
素直に聞いてみた剣八、コンからの返事（叫び）にまたもや首を傾げる。
「あ、じゃあもしかして、尸魂界には無くて現世にしか存在しない物なのか？」
「尸魂界がどうだか知らねぇけど…」
恋次は手をポンと叩いて豆電球を輝かせながら聞いてみると、
コンは自信なさげに肩を落としてしまった。
「詳細が分からなきゃ指令クリアできないんだから教えてくれ」
「エーーー!?」
恋次から頼まれたけどコンは答えたくない。
赤い物体は筒のような構造で持った感じかなり軽い、
剣八の大きな手で掴んでいるとサイズ感覚が分からなくなりそうだが、
長さはおよそ２０センチくらいだろうか。
じっと見詰めてくる二人の視線に耐えられずコンは青い顔を背ける。
「知らないお前等にドン引き」
「なんだと」
「いえなんでもないですごめんなさい!」
剣八に睨まれコンはガッツリと固まった。

そもそも、現世の代物が尸魂界に流通することはあまりなく、
特別な理由（イベント等）でもなければ浦原は運んでくれない。
つまり現世の物を入手するには浦原に頼むしかないのだ、
しかも浦原だって現世の品物全てを網羅している訳ではない。
無言の押し問答が続いていると今度は…。
ザバー!!!
突然上から液体が降ってきた！しかも剣八を直撃!!
助かったコンは胸を撫で下ろしたけれど、
液体を被ってしまった剣八を見て笑いそうになった。
だってそれどうやってもローションですよね!!!
透明のネバネバした液体を頭から浴びせられた剣八は、
何が起こったのか理解するのに時間を要し、赤い筒を持ったまま硬直。
「ＴＥＮＧ○持ってローションぶっ掛けとかコントかよ！」
結局耐え切れずコンはひいひい言いながら腹を抱えて笑い出す。
テレビで見るお笑い芸人がローションまみれで対決するみたいな、
そんなコントの様なことが目の前の強面鬼神にぶっ掛けられたら、
誰だって笑いを堪えるのは不可能である。

そもそもＴＥＮＧ○は既にローションが充填されているので、
後から追加でローションは必要無いのだが、何故に…。
意味が分からない恋次は右往左往、
ローションを被ってしまった剣八を拭きたくてもタオルすらないし、
きっとハンカチでは面積が足りない、だってバケツ一杯分の量だもの。
「つまりお前は、赤い物体のこと理解してるってことでいいんだな？」
「えっ　はい！　あ…　つかマジで知らないのか？
お前等ピュアですか！イノセントですか！」
剣八が問えばコンはうっかり返事をしてしまった、
理解していると認めてしまったからには、赤い物体を説明しなければいけない…。
コンは今時ＴＥＮＧ○を知らない男子が居るとは素直に驚きだった。
「それはアレっすよ、オナ　」
「コンそれ以上言うな!!」
「説明しろっつったのそっちじゃねーかふざけてんのか!?」
コンが説明しようとしたが、嫌な予感がしたのか恋次が慌てて止めに入る、
しかし説明しろと言い出したのはそっちだぞ理不尽。
「おい恋次、テメェは黙ってろ」

直接説明を問い質したのは剣八だ、ここはもう隊長格に逆らえるはずもない。
水も滴る…じゃなくて、ローションも滴る良い男っすね更木隊長…なんて愛想笑い。
「で？」
ぎろりと目線でコンに促す。
「だーかーらー。　ＴＥＮＧ○ってのはオナホのことだろ？」
「おなほ…???」
知らない言葉が出てきた、剣八だけでなく恋次も初耳である。
そこでコンは剣八が１００年くらい古い人間に見えてきた、
オナホの代表格であるＴＥＮＧ○を知らないとは…。
もうあれだ、宇宙人と話してるみたい。（殺されるぞ）
「オナニーする時に使う道具。
穴が開いてる方にナニを突っ込んで使うんだ」
「ほう…」
説明を聞いて剣八は改めて赤い物体をしげしげと観察。
どうやら自慰の時に使用するらしい、ローションを滴らせながら剣八は、
どうやっても自分には無理だな…と直感。
なんせ剣八のアレはソレな規格外なので恐らくサイズが無理なのだろう。

指令的には剣八が使わなければならないようだが（ローション被ったから）
物理的に無理ならどうしようもない。
すると剣八は赤い物体を恋次に差し出してきた。
「え？　あの、えええ？」
恋次は剣八とＴＥＮＧ〇を交互に見て不安そうな声。
「俺には無理だ、お前がやれ」
「でもローション被ったの更木隊長…」
「俺のは入らねぇ」
「あ…。　で、ですよねー！」
風呂場で見てしまったのは萎えている状態だったが、
勃起したら更に大きくなるのだから必然的に無理だと恋次も理解できた。
理解できたとしても、それを使うのが自分ってのはちょっと…。
顔に滴っているローションを手で拭いている剣八を見上げて恋次は泣きそうな顔。
無理です、ここで自慰とか絶対無理です、勘弁してください。
普通に私用で使う分には試してみたい気がしないでもないけど、
こんな場所で強制的に使うなんてマジで無理。
「入らねぇって、どんだけデカイんだ…」

知らないコンは青ざめてしまった。
同じ男としてナニを見たいとは思わないが、
実際問題、勃起した時の大きさは知りたいような…怖いもの見たさで。
きっと剣八は一番大きなＴＥＮＧ〇じゃないと無理だと思います多分。
そこで恋次は考える、最初に落ちてきたのはウサ耳、次にＴＥＮＧ〇だった、
しかもローションまで降ってきたのだから、もう間違えようもない。
ウサ耳を装着するとどういう仕組みなのか勃起するようだし（鬼神でさえ勃起した）
指令を出した奴は三人の内の誰かの自慰を見たいのかもしれない。
ローションは剣八に直撃だったし剣八が標的か？
もし剣八が標的だったのならＴＥＮＧ〇のサイズを剣八サイズにしてくるはずだ。
それともウサ耳を持ってる人に照準を合わせたのか？
「お、おい恋次」
「？」
コンに肩を叩かれ呼ばれたので振り向いてみれば、
コンはどこかを凝視して微妙な顔をしていた、そっちを見遣れば…。
「トイレ…。　これ確実に自慰やらせるつもりか」
「マジかよおおおおお!!!」

恋次の細い声と同時にコンの叫びが木霊した。
「俺は無理だぞ！この身体は一護のだから勝手なことできねーし！」
もっともなことを言われたが逃げたい気持ちが透けて見える。
恋次だって剣八だって強制的に自慰など不本意である。
前回率先してウサ耳を装着した剣八は同じ過ちは犯したくない、
早く帰りたいからってウサ耳を装着したせいでとんでもない目に合ったのだから。
三人の間に会話がなくなり無言が続く。
剣八（目上の隊長格）にやれと言われたので、
本来なら恋次がやるべきなのだろうが如何せん…。
ぐるぐると悩んでいるとどこからともなく溜息が。
顔を上げると剣八と目が合った。
「…もういい」
ゆっくりと踵を返した剣八はローションまみれのままＴＥＮＧ○を持ってトイレへ…。
「おい恋次、いいのか？　更木って隊長なんだろ？
上の奴にやらせていいのか？」
立場上恋次が気まずくなったり副隊長と言う地位が危うくなったりしないか、

コンなりに心配してくれたようだ。
「だからって…」
コンの言うことも分かるし、でも自分が自慰なんて…。
「……そうだよな、死ぬ訳じゃねぇんだ！」
恋次はぐっと拳を握り顔を上げる。
もし自慰なんてしてしまったら恥ずか死ぬだけで、命が絶たれる訳じゃないんだ。
「更木隊長！」
「うぉっ!?　いきなり開けんな!!」
咄嗟にトイレのドアを開けたら洋式便座に腰掛けて袴を寛げている剣八の姿、
恋次がドアを開けたタイミングはまだ早かったようで、
剣八はＴＥＮＧ○を使う前だったが袴を脱いでいる、
下帯を脱いでいないのが不幸中の幸いだった。
流石にウサ耳は装着していなかったみたいだけど、何故かそこは準備万端臨戦態勢。
下帯越しとは言え勃起した先端が…。
（ぎゃあああああ!!）
恋次は内心叫んだ、実際に叫んだら剣八に失礼なのでどうにか踏み止まったのだが、
勃起してる亀頭が下帯を押し上げているのをしっかり見てしまって、

剣八の身体が大きいのでサイズ感が良く分からない。
いや、デカイにはデカイんだよ。
うまく言えないが遠近法（？）で距離や大きさに思考や脳が理解できない錯覚に陥った。
ほら、背の低い人に普通サイズが備わっていると大きく見える…みたいな、それの逆みたいな。
剣八はさりげなく手で股間を隠したが恋次に見られてしまったので今更感。
「いくらなんでも見られながら抜ける自信はねーぞ」
「す、すみません!!!」
恋次は慌ててバタン！とドアを閉めてしまった。
どうしよう、俺がやりますって言おうと思ってたのに。
剣八はやる気満々（？）なのか勃起してた…と思う。
あれ確実に勃ってたよな？じゃなきゃあんなデカイわけないよな？
混乱して立ち尽くしたまま動けない恋次。
意を決してドアを開けたのにこのまま剣八に任せてしまっていいのか。
いつだって自分は二の足を踏んで、大事な場面でしくじったりしていなかったか。
勇気と度胸はある、俺に足り無い物は…覚悟だ。

「更木隊長」
「なんだ。　どうでもいいが便所から離れろ気が散る」
ドアの向こうから聞こえてくるのはぴりぴりとした空気。
「このままじゃ不公平ですよね、次は俺がやります」
しかし剣八からの返事はない。
離れろと言われたのでドアから離れようと身を引いた時だった、ドアが開く音が…。
え？　早くない？　もう終わったの？　まだ1分と経ってないぞ。
なんて思っていたら、ドアが少しだけ開いた状態でＴＥＮＧ〇がぽいっと放り出され、
どういうことなのか見守っていると再びドアが閉められた。
「それお前が使え、俺のは入らねぇ」
なるほど！　つまり自慰はするがＴＥＮＧ〇は恋次に預ける、ということらしい。
もうここまで来るとやっぱりマジで自慰するんですよね…ハア。
「なぁ恋次」
「なんだよ」
「あの更木が本当にオナニーしてると思うか？」
「じゃなきゃ指令クリアできねーし」

「だから、」
　コンが反論するので恋次は苛々しながら振り返る。
「指令のためとは言え、そこまでする必要があるのか？」
「でも今までは確実にクリアしないと解放されなかったんだ」
「例えば的確に『これ』って言う指令があれば分かるよ、
　でも明確な言葉がある訳でもねーし、
　ＴＥＮＧ○があることで俺達が勝手に解釈してるだけってことも…」
　コンのまともな意見に恋次は低く唸る。
　確かにいつだったか四十八手をやらされた指令も、
　実際に挿入しなかったし服すら脱いでいなかったのに指令達成されたよな。
　でも今回は四十八手とは毛色が違う、道具が落ちてくるという具体的な内容である。
　ウサ耳は確実におったてるための道具だ、ＴＥＮＧ○だって自慰の道具だし。
　そんでもってローションまで降ってきた、だったら導かれる答えはひとつしかない。
「じゃあ、他にどんな答えがあると思う？」
「うーん…そう言われるとわっかんねぇけど」
　言いながらコンは床に転がっているＴＥＮＧ○を拾い上げて、
　ナニを突っ込む穴を覗き込む。

「別にオナニーしなくても指突っ込むだけで終わったりしてな！」
笑いながら指を突っ込んだコンは冗談っぽく中を指先で探る。
すると…。
「あれ？」
なんだか部屋が眩しいぞ。
「えっ　待てよ！　もしかして本当に指突っ込んだだけで指令達成?!」
恋次の狼狽える声、眩しい光に目を閉じてＴＥＮＧ○を落としてしまったコン。
もしかしてトイレの出現は引っ掛けだったのか?!
「更木隊長おーーーー!!!」
恋次の叫びも虚しく部屋は光に包まれ視界が揺らぐ。

眩しさが収まって目を開けるとそこは現世の一護の部屋だった。
恋次はガバっと部屋を見渡す、トイレに入っていた更木隊長はどうなったのか！
ぱっと振り向いたらベッドに座っている剣八。
「更木隊長…？」
「焦った、かなりギリギリだった」
どうやら事を済ませるには時間が短く、

勃起したアレを無理矢理下帯に押し込んで（痛い）
どうにか下帯を締めて袴の腰紐を結んでいる時に脱出したらしい。
「てかコレ、どうすんだよ…」
コンの手にはＴＥＮＧ〇が…。
剣八もまだローションまみれなので一護のベッドはびちゃびちゃに濡れている。
恋次は脱出できたことで気が抜けてうんざりしながら。
「燃えるゴミに出しとけよ」
「そんなことしたら俺が一護に疑われるじゃねーか！」
だからって剣八は使えないし恋次も持ち帰るのは嫌だ。
ここは現世で処分してしまうのが一番良いのだけれど。
恋次とコンの会話を聞いていた剣八は大きな溜息。
「貸せ」
ずいっと大きな手がコンに伸ばされる、
貸せと言われたので素直に渡すと…。
ゴシャァア!!
「!!」
なんと剣八が片手で握り潰してしまった！

ローションでぬるぬるのはずなのに持ち前の握力でぬるぬるを凌駕した。
気合と根性と持ち前の馬鹿デカイ霊圧でどうにかできることってあるんですね。
粉々になったＴＥＮＧ○の哀れな残骸が床に落ちる。
「証拠隠滅完了だ」
強引にも程がある。
これにて一件落着？　万事解決？　でも一護のベッドは濡れたまま。
恋次はコンの肩に手を乗せてぽんぽんと軽く叩く。
「コン、シーツの洗濯だけ頼むわ…」
「お、おう…」
気の無い返事をしたところで一護が帰って来た、窓から。
「お前等、俺の部屋でなにやって…　おい剣八ー!?
ベッド汚してんじゃねーよ!!　てか何事!?!?!?」
剣八だけローションまみれとかどんな椿事だ。
「成り行きだ、コンって奴が洗うから心配すんな」
自分の部屋にコンが居るのはいい、だが恋次と剣八が居るし、
剣八は濡れたままベッドに座ってるから酷い有様だし、
床には粉々になった赤い物体があるしもう訳分からん。

恋次から説明を受けた一護は、剣八にタオルを渡して、
三人に対しご苦労様…とお茶を出してあげました。

ちなみに余談ですが、剣八が懐に忍ばせたウサ耳は最終的に持ち帰ってきてしまい、
ＴＥＮＧ○と同じく握り潰そうとしたが素材が柔らかく粉々にできなかった。
燃えるゴミに出すのもなんだか怖くなったので、
隊舎の自室にある金庫にしまっておくことにしました。
再び使うことは無いけれど、リアルでもあの欲情が蘇るのか確認するのも忌々しい。
誰の手にも渡せない恐ろしい代物だから結局剣八が預かる形に落ち着きました。
これで二度とウサ耳が降って来ることはないだろう…多分。
「燃やしちまおうか…」
自室にある金庫を見ながら剣八は呟く。
それが一番確実なのだけれど、もう一度ウサ耳を見るのも嫌だ、触りたくもない。
しばらくはそのまま封印されることになったとさ。

終わり

０８『指先のジレンマ』

白い部屋、第八回選手権。
「第八回ってなんの選手権だよ、主語を書け」
白い部屋には無駄にデカイ横断幕が掲げられており、一護が顔を顰めながら突っ込んだ。
「もう慣れたとは言え、毎回違う指令だから緊張するよな」
「まぁな」
恋次の呆れ声に一護も頷く、しかも回を重ねるごとにエスカレートしてる気が…。
だが一護は前回のＴＥＮＧ〇事件の現場には居らず、
一護の代わりにコンが強制連行され、恋次から掻い摘んで説明されただけなので、
詳細は分からないが自分が強制連行されなくて良かったと思っている。
なんせＴＥＮＧ〇なんて見ちゃった日には恥ずかしくて顔を上げられなくなる（ピュア）
「張り紙があるぞ」
剣八の低い声に一護も恋次もそちらを見遣る。

デカイ横断幕の下に張り紙があったので三人で張り紙の前へ。
「なになに？　今回は三人の中から勝者を決める指令です？
勝者って…斬魄刀も無いのにどうしろと…」
「今までの流れからじゃんけんってことは無さそうだし」
「ああ。　どうせまた下らないことやらされるんだろうな…」
一護が読み上げ恋次は不安になる、恋次だけでなく一護だって不安だ。
毎回指令が違うから本音を言えばここには来たくないんだ、
ただ風呂に入るだけだった頃が懐かしいぜ…。
「選手権って書いてあるから何かを競って勝者を決めるのか」
張り紙を見ながらふむふむと剣八は腕を組み低く唸る。
しかし具体的な内容は書かれていない、単純にじゃんけんや戦いでの選手権ではなさそう。
張り紙の最後には何故か『↑』と書かれていて、
三人は同時にそちらを見るとそこには…。
「椅子？　なんで椅子？」
混乱する恋次、そこには椅子が一脚だけ置かれている、
椅子と言っても良くあるパイプ椅子だ。

どこかに説明が無いかと椅子の周りをぐるりと一周、
椅子の背に張り紙があり三人は腰を屈めて覗き込む。
①一人が椅子に座る
②他の人が座った人をたたせる
③長く座っていた人が勝利
「意味不明にもほどがある…」
青ざめる一護、『たたせる』がひらがなってのがどうも怪しい。
「勃たせる…じゃなきゃいいんだけど」
言いながら恋次は今までの流れを考え溜息を禁じ得なかった。
もし仮に『たたせる』が勃起の意味だとしたら、
この三人の中で一番耐性があるのはどうやっても剣八しか居ない。
一護も恋次も童貞だしそれほど詳しい知識を持ち合わせていない訳だし、
童貞ではない剣八は遊郭でそれなり（ただし回数は少ない）に経験していて、
一般的な知識だけでなくマニアックなことまで知っているのだから、
どんなに足掻いても剣八が一番有利だった。
「不公平じゃねぇかよ」
「…今回ばっかりは、更木隊長には悪いですけど、俺も不公平だと思う」

「勃たせるかどうか分かんねぇのに、やる前から文句言うなよ。
まぁ俺もそれは理解してるつもりだ」
だって二人とも童貞ですもんね。
一護に続き恋次も顔を青くして、剣八には申し訳ないが素直に申し出た。
「じゃあ試しに座ってみる」
一護はそれほど危険はないだろうと判断して一番に座った、
そして恋次に向かって両手を差し出す。
「引っ張って立たせてくれ、これでカウントされるならこの方法でいいんじゃねーの」
「なるほど、色々試してみる他ないよな」
恋次は一護の両手を掴んで軽く引っ張る、その勢いに乗せて一護が椅子から立ち上がった。
「…」
「…」
「なんもないな」
「これじゃダメなのか！」
剣八の突っ込みに恋次はがっくり、まぁそうだろうとは思ってた。
「どっちでもいいから座れ」

剣八は腕を組んだままふんぞり返って二人に指示を出す。
勿論剣八は有利なので座ってる人に対して二人掛かりでたたせようとは思っていない、
それこそ二人にハンデがなきゃ理不尽だし。
「俺からいきます」
恋次が椅子に腰掛けると剣八は。
「二人とも目を閉じろ、流石に見られたくねぇ」
目を閉じるの!?　一体何をするのか不安になる。
まさか直接股間を触ってくるってことはないよな？ないですよね更木隊長!?
ガクブルになりながら二人は恐る恐る目を閉じる。
それを確認した剣八は座っている恋次の前に膝を着いた。
空気の動きや気配で恋次は目の前に剣八が居るのを感じるし、
傍に居る一護も剣八が身を屈めたか座ったかなんとなく分かる。
「恋次、片手を前に出せ」
片手？　良かった、股間を触ってくる訳じゃないんですね。
ほっとして右手を前に突き出した恋次。
けれど恋次は過去に経験したことがない感触にめちゃくちゃ混乱した！

恐らく自分の手を取っているのは剣八だ、手を出せと命令してきたのは剣八だし、
しかも一護だってきっと目を瞑っているのだから、
僅かに聞こえてくる妙な音もきっと剣八が発しているに違いない。
（何の音だ…？　てか、なんかぬるぬるする…）
じゅる。　と聞こえてきた音と同時に恋次はうっかり腰が浮いた。
「な、なん…っ!?」
ぬるぬるするだけじゃない、なんか不思議な感覚、今までに経験したことのない感触。
（もしかして…舐めてる!?!?）
おかしい、断然おかしい。
音からして多分舐めてるんだ、それなのに脳内が混乱している。
中指と薬指を同時に口に含んでいるのか指の股を舌が這い、
時折吸い上げては爪の先まで丁寧に舐め上げられる。
かと思えば関節を軽く舌先でなぞられ、まるで…。
指じゃない違う場所を舐められているような錯覚に陥った。
（やば…!!）
相手が男だと頭では理解している、だが初めての感覚に恋次は動揺し、
尚且ついやらしい舌の動きに摩り替わった錯覚が強烈過ぎて…。

恋次は咄嗟に左手を挙げた。
「参りました!!」
(男相手に勃つとか人生最大の汚点…)
恋次は心の中で泣きながら目を開ける、やっぱり剣八は恋次の指を舐めていた。
現実を見た瞬間胸が痛んで涙が溢れそうになる、
男としてのプライドはズタズタだ、だって本当に勃つなんて…。
恋次が参りました宣言をしたので一護も目を開けた、
ちょうど剣八が立ち上がったところだったので、
恋次が指を舐められていたのを見ていない。
けれど恋次が本気で傷付いて泣きそうな顔をしているのを見て、
これでもかと不安が煽られ一護は身体が硬直して動けなかった。
(一体恋次は、剣八に何をされたんだ…)
泣きそうになるほどのことをされたのかと怖くなってしまう。
そんな時だった、横断幕の下にある張り紙の横に恋次のタイムが表示された、
やっぱり『たたせる』の意味は勃起だったようです。
しかもタイムが速くて恋次は余計に胸を抉られた。
「次、一護座れ」

「…素直に怖い」
「危害は加えねぇよ、ぐだぐだ言ってねーで早くしろ」
剣八に凄まれ一護はぎこちなく椅子に座った。
一護と恋次が目を閉じたのを確認し、剣八は再び跪いて一護の手を取る。
恐らくだが、指先を舐める位置が悪いのだろう、
一般的に誰だって指を舐められると勝手に脳内変換されるのだが、
剣八が指を舐めているのはちょうど腰の高さなので、
脳内変換が更に悪化していると言える。
ぴちゃぴちゃとぬめった音が聞こえてくる、
それと同時にいやらしい感覚が身体を襲った。
ぬるぬるあたたかい、爪を吸い上げられたり指の股をゆっくり舐められ、
ところどころ歯が当たったりするのも妙にリアルだった。
剣八は間違っても股間なんて舐めてないし、
確実に指先を口に含んでいるだけなのに、どうして…！
（な、なんで…!?）
一護も恋次と同じく動揺し混乱して身体ががっつりと強張る。
（違う！違う！舐めてるのは指だ！）

心の中で呪文のように繰り返してみても、身体は正直に反応し始めた。
一体どういう仕組みなのだろう、指先を舐められているだけなのに、
本当に肉棒を舐められている錯覚に陥るなんて初めてのことだ。
「ま、参った!!」
一護は慌てて左手を挙げた、時間的には恋次と同じくらい。
「なんなんだこれ、なにが起こったんだ…?!」
恋次だけでなく一護も混乱の真っ只中。
泣きそうな顔で立ち上がることもできない一護の前で剣八はゆっくりと立ち上がり。
「人間の指先は思ってる以上にその情報を脳に伝達する。
目を瞑ることで余計に肉棒を舐められてるような感じになるんだ」
「はっきり言うなーーーー!!!!」
一護はうわああ!と蹲った、そんなはっきり最終宣告しないで!
恋次のタイムの下に一護のタイムも表示される、全く同じで奇跡としか。
次はいよいよ剣八の番だ、剣八はどっかりと椅子に座り手を膝の上に放り投げる。
「好きにしろ」
とは言われても…一護と恋次は未だに傷付いたままで顔を見合わせた。
流石に他人の指を舐める度胸は無い。

ハンデとして二人掛かりで剣八を勃たせることに異存は無いが、
どうすればいいのかさっぱり分からない。
「まずどうする？」
「どうするって言ってもなぁ…」
恋次は声を震わせながら、一護も頼りなさげに肩を落とすしかない。
なんせ二人とも知識が足りない、しかも相手は女じゃないんだ、
普通の知識ではきっと剣八をおったてるなんて不可能じゃないのか。
「脱がせてもいいし、どこ触ってもいいぞ」
なにそのドＭ発言、引くわ。
と言うか脱がせるのも嫌だし男の股間なんて見たくもないし触りたくもない。
しかし重要なことを剣八は二人に教えていない、
本当は両刀でタチもネコも可能であることを！
つまり、童貞である二人と同じく剣八としても状況はそんなに違いはないのだ。
知識がある分、有利に見えるけれど実質スタートラインは同じである、
何故なら、剣八は両刀だから。　例え相手が男でも欲情できるし、
一護と恋次は男に対してそんな気は起きない分、ある程度耐性があった。
剣八の知識と、二人の男に対する免疫を差し引けば五分五分になる訳だ。

剣八は元々性欲に対して無頓着であるため、来るもの拒まず去るもの追わず。
相手が誰であろうと自分を満たすだけの行為と割り切っているから、
性別なんて些細なことなのだそう。
逆に言えば、男女問わずなのだから恋愛という琴線がゆるゆるで触れて響くこともないし、
無頓着ゆえに自分で琴線を張ることもない、だから剣八は今まで一度も恋愛など無縁だった。
興味が無いことには誰だってそんなもんだろう。
「エロ本でもあれば参考にできるのに」
「エロ本って…ホモ雑誌の間違いじゃないのか」
「どっちも無いしどうすんだ」
「うーん…」
恋次の提案に一護も困惑、どの道未経験の二人では歯が立たない。
そんな中、剣八の大きな溜息が聞こえて顔を上げる。
「お前等にひとつ教えてやる」
「「？」」
教えてやるって、もしかして性的な弱点でも教えてくれるのか？

男だったら誰だって肉棒が弱点であることは分かるのだが、
それ以外で弱点って存在するのか？　二人は首を傾げるしかない。
「俺は両刀だ、男も女もどっちでもいい」
「「え…？」」
「そんでもってタチもネコも可能だ」
「は？　たち？ねこ？　なにそれ」
一護の素っ頓狂な声が漏れた。
恋次は聞いたことがあるような無いような…記憶を引っ張り出そうと眉を寄せる。
「タチは攻め、ネコは受け。　もう分かるよな」
「あ…　そうだ！タチとネコって聞いたことあるぞ！
え、でも、更木隊長マジで言ってます…？」
「マジもマジ」
と言うか剣八が実は両刀だったことにまず驚いた、
それって男に対しても欲情できるってことになる。
なんか分かんないけどぞっとした。
別に自分が狙われるとかそんな危惧はないけれど、
自分では理解できない未知の世界は恐ろしく見えてしまうものだ。

知りたいとは思わないが、もしかしたらそんな世界を今から垣間見てしまうのか…。
「俺はパス」
「一護?!」
「剣八がどっちもイケるって分かってたら、そんなことできねぇ」
一護は腕を組み二人から顔を背けてしまって、
焦った恋次は一護と剣八を交互に見て狼狽える。
「だってそれって、剣八に対して失礼だろ。
俺達は女にしか興味無いからモラル的に成り立ってたんだし、
もし剣八が本当に男もＯＫなら倫理に悖る範囲になる」
「…だよな」
ここは潔く負けを認めよう、そもそも『たたせる』勝者になど興味がないのだから。
指令をクリアできなくて部屋から出られないとしても、
一護は人として大事なことまで曲げたくはなかった。
だがこのまま白い部屋から出られないとなると、三人としても困る訳で…。
いつだったかのウサ耳があれば簡単に終わるのに！
ウサ耳なら装着したら勝手に勃つんだからそれに越したことは無いじゃないか。
しかしこの場にウサ耳は無い…と言うか未だに剣八の自室にある金庫で眠っている。

こんなことなら持って来ればよかった…。
「てか剣八、本当に…？」
「ああ」
「そんな秘密教えちゃって良かったのか？」
一護は申し訳無さそうに言ったが剣八は鼻を鳴らして嗤った。
「別に秘密でもなんでもねーよ、隠してる訳でもねぇし。
誰にも聞かれなかったから言わなかっただけで。
だいたいセックスだって相手から求められて初めて欲情すんだ、
それが男か女かの違いでしかねぇ」
欲情に関する感覚は人それぞれなので、来るもの拒まず去るもの追わずの剣八は、
自発的にセックスで誰かを求めたことは一度もなかったのだろう。
名も無く居場所も無かった過去の剣八、他人から求められることでやっと欲を覚えた。
逆に言えば誰かが求めない限り剣八から誰かを求めることは無いのだ、
唯一剣八が求めるモノは『戦い』だけである、
それが自身の礎であり他者には侵せない領域。
一護にしたって、人様の恋愛感をとやかく言える立場ではない、

自分が誰かを好きになることを他人が文句を言えないのと同じように、
一護も恋次も、誰だって剣八の恋愛感を否定する権利などないのだから。
同性愛がダメとは思わない、きっと好きになったら性別なんて後回しになる、
人を好きになるって多分そういうことだと思うから。
それに現世では同性愛の人も少なからず存在するし、
一個人で否定なんてもっとできないししたくない。
人それぞれの幸せのために一生懸命な姿を快く思う。
だったら尚更剣八に触れてはいけない。
こちらから恋愛感情を持ち出すことはないけれど、
剣八が誰でもＯＫなら安易に手を出してはいけないと一護は感じたのだ。
「なぁ一護、どうする…？」
「そうだな…俺と恋次の負けってことでいいだろ」
「勝敗は構わねぇけど、指令はどうなるんだ？」
うーん。　一護と恋次は同時に首を捻った。
負けるのは構わないけど部屋から出られないのは困ったもんだ。
「だったら逆に、剣八ってどんな時に勃つんだ？」
男女どちらでも構わないなら一体何を持ってして興奮するのだろう、

女に対してなら一護も恋次も分かるけど。
先日勃起したのはウサ耳のせいだったし。
「溜まったら抜く程度だし、普段からそんなこと考えねーしな…」
剣八まで首を捻る結果になった。
しかもこの部屋にはエロ本などの具体的な物は一切置いていない、
剣八が自分で勃たせてもらうしかないのだけれど…。
「じゃあ気持ち良いこと考えてもらうとか」
「そのくらいしか方法が無いよな実際」
恋次の発案に頷く一護、ウサ耳などの道具が無いのだからそうするしかない、
剣八が両刀な以上、一護と恋次は触れることさえ失礼に当たると考えている。
そこで恋次は何かを思い出した、そう言えば…。
「更木隊長、先日ここへ来た時にトイレで抜くとかなんとかで、勃ってませんでした?」
「えっ　そんなことあったのか」
「ああ、確かあの日は更木隊長…ウサ耳着けてませんでしたよね」
理由は分からないが、トイレに入った剣八を追い掛けて恋次がドアを開けた時、
確かに剣八は勃起していた、ウサ耳を装着してた訳でもないのに、なんでなん?
「それは…」

珍しい！剣八が口篭ってるなんて!!
しかも顔を逸らして何やら隠している様子。
流石に剣八もこれには参ってしまう、理由を言うのが恥ずかしい。
「トイレに入ってからそんなに時間が経ってた訳でもないのに、
俺がドアを開けた時に勃ってましたよね、俺見ちゃいました…」
「…」
「あ、間違ってもわざとじゃないですよ!?」
「分かってる」
咄嗟に開けてしまったのは剣八も理解している。
ここで理由を言えってそんなの勘弁してくれ。
初めてではないだろうか、剣八が狼狽えているなんて。
一護と恋次は不思議そうに剣八を見詰める、
そんな視線に耐え切れず剣八は不意に顔を逸らした。
「ＴＥＮＧ○ってのがどういうモノなのか、か　考えてたらだな…」
つまり、サイズ的にＴＥＮＧ○を使うことはできなかったので、
想像してたら腰にきた…と言うことらしい。
なんだかんだ言って剣八だって普通に健康男子ではないか。

相手が男だろうが女だろうが欲情できると言うことはつまりそういうことだ、
異常でもなんでもない、シチュによって欲情の熱が揺れたり揺れなかったり。
微妙に顔が赤いような気がする、事実剣八は恥ずかしくて顔が熱い。
「あー」
一護と恋次の溜息みたいな相槌。
「そりゃ確かに想像したら誰だってそうなるわな…」
「そ、そうだよな、一度試してみたいって思ったりするよ誰だって」
冷や汗を流しながらフォローに回る、剣八一人だけ恥ずかしい思いをさせるのも忍びない。
実際に使ったことは無いのでどんな感じなのか教えることはできないが、
想像なら無限大、どんなこともやりたい放題、それだけ妄想は膨らんでいく。
「こう…相手にＴＥＮＧ〇を握られて、自分のタイミングじゃなくて、
相手にやってもらうって感じもいいかもしれない」
「お、それいいな。　個人的には相手もＴＥＮＧ〇に慣れてなくて、
めちゃくちゃ恥ずかしそうに動かしてくれたらポイント高い」
一護が言えば恋次も頷いて話しに乗る。
「そうそう、恥ずかしいのに一生懸命やってくれたら可愛いよな」

「分かるー」
二人がＴＥＮＧ〇で盛り上がっている中、剣八だけは焦っていた。
そんなオカズみたいなこと聞かされたらこっちだって想像してしまう。
「最後にお掃除フェラは絶対だな」
「恋次お前、俺と気が合うな」
「マジか、一護もフェラ好きなのか」
「男だったら誰だって好きだろ、寧ろ嫌いな奴なんて居るのか？」
ちなみに二人は剣八のことを思って素直に曝け出しているだけで、
普段からこんな会話はしないし実は初めてのことだ。
だいたい一護も恋次も顔を合わせるのは虚退治の時だけで、
脅威が差し迫った状況でもなければ一緒に行動することもない。
たまにイベント事（クリスマス等）で一緒になることはあっても、
二人きりになったりはしないので下世話なことなど話したこともなかった。
「精液でどろどろになってるのを、恥ずかしながら舐めてくれたら最高」
恋次が目を閉じて相手を想像しているのか嬉しそうに語る。
「そんでもってちゃんと全部舐めて綺麗にするまで終わらないからな！
って感じで、」

「参った」
「「は？」」
一護も便乗したら…突然聞こえてきた剣八の声に驚いて二人は剣八を見遣る、
普通にエロい話をしていただけなのにまさか…。
「い、今ので勃ったのか!?」
「うるせぇほっとけ」
一護が思わず聞くと剣八は口を尖らせてしまった。
真っ赤にはなっていないけれど、剣八の顔が若干赤いような気が。
こんな簡単な会話で勃つもんなのか!?
「うわ…　なんか感動」
「俺も…」
一護と恋次は訳の分からない達成感に満たされた。
今まで一度も誰かを感じさせたことなど無い二人は、
相手があの剣八だったとしても、自分達の会話や行動で誰かを感じさせた事実に、
無知で経験もない自分にも誰かの熱情を動かすことができたのだ。
妙に感動を覚えてしまった、ちょっと嬉しい。
すると横断幕の下にある二人のタイムに続き、勝者更木と表示された。

いや、うん、分かってる。
どうやったって剣八には勝てない、そもそも勝つ隙間すらないのだから。
だんだんと部屋が光に包まれていく。
なんだか久しぶりに…銭湯に入った時以来の気分の良い脱出だ、剣八以外。
剣八だけは苦虫を噛み潰し、なんとも言えない複雑な気分。
一護や恋次と同じく普通に欲情できる同じ男だと知られて、
それが異様に恥ずかしかった、今まではそんなこと考えたこともなかったし、
同じであるのは当然だと思っていたのに何故だろう…。
けれど、二人の指を舐めて勃たせた事実は変わらず、
きっとお互い様だろうと心の中で折り合いを付けた。
もし…　もし俺が、誰かに恋をするとしたら…。
剣八は鼻で笑って俯いた、床をぼんやりと見詰めたまま。
（そんなの有り得ねぇ）
他人から求められることの喜びを知っているから、
自分から誰かを求めるなんておこがましくてできない。
めんどくさいってのが一番の理由だが、
他人の人生に介入してまで求めることが不相応で、

そしてそんな資格は自分には無いと剣八は思った。

終わり